

---

# オッサンの異世界記

焼きうどん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オッサンの異世界記

### 【Nコード】

N0990Y

### 【作者名】

焼きうどん

### 【あらすじ】

異世界に迷い込み、そこで出会ったクワガタに殺されたオッサン。次に気が付くとオッサンはそのクワガタ（幼虫）に！  
それからなんやかんやあって新たな人種であるムシビトに進化したオッサンは旅に出る。

これはオッサンが紡ぐ異世界の物語。

セクハラ紛いの言動があります。

## おっさん、クワガタに転生

気が付くとおっさんはクワガタになっていました。

あ、この場合のおっさんって言うのは一人称ね。つまりミーのこと。なぜこんな一人称かと言うと、十五歳離れた従妹に〇〇おじさんって呼ばれるから。や、最初は「おじさんじゃなくてお兄さんだよ」って訂正してたんだよ。でもさあ、なんか三十越えた辺りからどうでもよくなってきた、開き直すように「ああそうさおじさんだよ。なんなら一人称をおじさんにしちゃうぞ」って言ったらその従妹の父親、つまりはおっさんの叔父に「君がそんなんしたら本物のおじさんな俺はどうしたらいい？」って真剣な顔で聞かれたから「じゃあおっさんにします（笑）」みたにふざけたら「じゃあそれで決定ね」っていい笑顔で従妹が言った後に引くに引けなくなるとこまで持ってた今に至るとい感じ。

んで、話を戻すけどおっさんはこれでも元々人間だったわけよ。

じゃあなんで今はクワガタなのかつーと、よくわかんない。

でもある日ふと気付いたら森の中にいたんだ。それまで住宅街を歩いてたのにいきなりよ？

こりゃ白昼夢かと思ったけど妙にリアルな感触や匂いを感じた。だが夢だとこの時は思ってたんだ。だって、おっさんはまだDTな中坊の頃に同じような超リアル夢を見たことがあるからね。「あ、こんなにリアルな夢は久しぶりだ」って感激してたもん。ちなみにその時の夢は思春期特有の可愛らしいエロ夢だった。巨乳なロシア娘（ここが重要ポイント）を口説いてそのたわわなおっぱいを揉む。今でも覚えているあの感触は現実で触れた数人の女性の胸と比べると極上だったと言わざるを得ない。

え？ おっさんがリア充？ 現実で女性の胸を揉んだだけで何言ってるの！

言っとくけどね、ほとんど素人さんじゃないから。つーかおっぱいパブだよ。いわゆるお金の関係です。

いや、結構良心的なお値段なんだよ？

諭吉さんが財布からフライアウェイしていくお風呂に比べればなんてこともないじゃないか。

おっと、パブの話はもういいね。

んじゃクワガタになつた経緯を説明しようか。

夢だと認識しながらもおっさんは森を歩いて美人なお姉ちゃんを探しました。いや、夢だからこそ探したんです。深くはツツこまないでね。オッサンという生き物は若人と違う意味で性欲が旺盛なんよ。不倫してんのは大体オッサンだからね。

ちなみにオッサンと心の中でカタカナ表記してるのが世の中に漫然と生きるおやじを表してます。

## 閑話休題

そして森の中を彷徨っていた時に出会ったのがでっかいクワガタ。どんだけでかいかと言うとおっさんが横になって寝た時より幅が広くて、クワガタの目線がおっさんくらいの高さまである。長さはおっさん二人が縦に寝れるくらいかな。まあ、言ってしまうえばライトバン（車）くらいの大きさかな。

んで、「うおーでけえ……」っておっさんが感心していると、そいつたら顎はなを広げておっさんのことをジョッキンコしちゃった。

どこまで顎を閉じれるねんっ！　ってツツコミたくなるくらいに顎を閉じられたせいでおっさんは死んじやった。ま、幸いなことに痛みを感じる前に死んじやったから実感わかないけど。でも確かに死んだ。

んで、起きたらクワガタだったわけさ。

なんでって聞かれてもおっさんにもわかんない。ほら、あれじゃね

？ 死して尚、魂だけは身体に宿っていたが、クワガタがそれを喰ったせいでその子種に魂が宿りました的な？  
うん、わかんないからこれでいいか。

おつと、説明不足だったけどおっさんは多分おっさんを殺してくれたクワガタの子供として生まれました。なぜ多分なのかはクワガタの区別なんかつかねーよってことでご理解いただきたい。

クワガタの子供だったら幼虫じゃねーの？

と思うかもしれないが、確かに幼虫だったよ？ 生後三日目までは

……

このクワガタ異常に成長はえーの！ しかも卵は地中に産むでもなく地面の上に産んで両親が子育てまでするんだ。おかしいけどあんまりに普通なんで受け入れちゃった。

そしたら生後四日目の朝、起きたら蛹になってた。

そんな時に脳内（あるかどうか不明だがこうして考えることが出来るのだからあるのだろう）で【キラースタッグビートル（幼虫）はキラースタッグビートル（蛹）に変態しました】って聞こえてきた。

誰が言ってるか知らないけど変態はないだろ？ 確かに昆虫が幼虫から成長していく段階は変態って言うのかもしれないけど、オッサンに変態は禁句だよ！ もう少しオブラートに包んで欲しいよまったく！

てゆーかキラースタッグビートルっておっさんのことだよね？ ま、長いからK S B って勝手に言ってるけど。

そんなこんなK S B（蛹）のまま飲まず食わずで一週間過ごしました。正直これ以上はきつーいと思ってたんだけど次の日起きたら【キラースタッグビートル（蛹）はホワイトキラースタッグビートルに変態した】という脳内アナウンスが流れた。  
だからもう少しオブラートに（略）

まあ、無事に成虫となったわけだが黒光りしてる父親とは違い、お

っさんは白いクワガタになった。勘違いしてはいけけないのが、おっさんが特別なわけじゃなくて蛹から孵った他のクワガタ（兄弟達）も皆白いんだよ。

時間が経ったら黒くなるということもなく、成虫になったんだから出ていけとばかりに追い出されてしまった。

そして今に至るというわけ。

こうゆう時は解説役なのがいってくれと助かるのだが、両親も兄弟も「キシヤーキシヤー」的な発音しか出来ないから何もわからないし、クワガタのボディーランゲージもイマイチ伝わらない。ということでおっさんは途方に暮れているのです。

兄弟は皆、何処かへと行ってしまった。

おっさんは一人（匹？）寂しく森の中を歩き続ける。

うん、予想外に疲れない。

運動不足やタバコの影響でここんとこ体力ががた落ちしてたのが嘘のようだ。

っかよく考えたらおっさんの背中には翅があるじゃないか。よし、ならば人類の夢である舞空術でもやってみようかな。

アイー、キャン…… フラァーイ！

…………… あれ？ どうやったら飛べるわけ？

## おっさん、食べる

結論から言おう。

おっさんは飛べました。

要領的には瞬きを高速でしながら歩いてる感じだ。

しかし、地面から三十センチくらいをホバリングしてるだけである  
と言っておく。

それでも飛んだことに変わりはなく、おっさん的には大満足な結果  
です。

さて、飛行実験も終わったし次は何をしようか……

うん、決めた。

まずは飯だ飯。

おっさんと言うか、このクワガタの食糧は樹液というわけではなく  
(しかしスウィーツ感覚で食べることがある) 肉だ。

おっさんがまだ幼虫だった頃は両親が採ってきてくれたのだが、今  
は自分で調達しなければならぬ。

この体になっておっさんは好き嫌いがなくなった。

今では何食ってもうまいと感じる。

三十過ぎた頃から肉派から魚派に転職したはずなのにね。

野菜はこの体になってから食ったことはない。

だから本日は自生している野菜的なものとか果物的なのを探して食  
おう。

やっぱこの年になってくると体が健康面を考慮しはじめるのか無性  
に野菜が欲しくなる時があるんよ。

つか何より野性の獣狩るのとかおっさんにはレベル高すぎ。ロッ

ブイヤーさんみたいな動物に角生えてる奴とか黒い毛並みの狼的な動物とか、ぐるぐる唸りながら二足歩行してる熊さんとかいるんだけど……おっさんには無理。

とゆうわけでここに生えてるキノコって食えんのかな？

なんか黄色いけどおっさんの好きななめことかも黄色っぽいしイけるだろ。

お、そこそこうまい。

……………あれ？ か、身体がしび、れて……………う……………ご……………け……………

【ホワイトキラストッグビートルは麻痺状態になった】

↓数十分後↓

【ホワイトキラストッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

いやー参った。

ありゃ、ダメだわ。

素人がキノコに手を出しちゃいかんね。

食えるキノコによく似た毒キノコもあるってことを失念してた。毎年中毒に陥る人がそこそこいるから気をつけなければな。

と、そうこうしている内に林檎のような赤い果実を発見した。おっさんの出身地の影響もあってか、ほとんど躊躇わずにはくりとひと飲み。

【ホワイトキラースタッグビートルは毒状態になった】

あれ？　なんか目が霞むと言つか、苦しい……

お、おえ……

きぼぢわるい……

〽二時間後〽

【ホワイトキラースタッグビートルは毒回復力上昇のスキルを得た】  
ふう、あーきつかった。おっさんがこんなに体調悪くしたのって高校の時に友人からインフルもらって寝込んだ時以来だよ。

それよりも食える物を探さねばな。

こうなったら野草を食つか。

お、これ山菜じゃね？

おっさん田舎育ちだから山菜はわかんよ。おっさんの祖母がよく採ってきてたからな。

あれ……　なんだか眠く……

【キラースタッグビートルは睡眠状態になった】

〽数時間後〽

【キラースタッグビートルは睡眠回復力上昇のスキルを得た】

いやー、なんか知らんけどよく寝た。

でもなぜだろう……

眠ったのに疲労感やその他が解消されてない。

ま、いつか。食える野草なわけだし。

もう一つ……ぐう……

【ホワイトキラストッグビートルは睡眠耐性のスキルを得た】

ん？ 痛っ！？ なんか痛っ！？

チクチクとした痛みに意識が覚醒する。

何事かと思つて周りを見渡して見れば、おっさんをロップイヤーが角で突き倒していた。

なんつーか地味に痛い。

爪楊枝で肌を刺さるほどの力ではないけどつんつんやられてる感じ？  
まあ、弱肉強食って奴かね？

そりゃ無防備に寝こけてる奴がいたら好機とばかりに襲いますよ。

とゆーわけでおっさんは逃げます。

戦わないのかって？

いや、おっさんに実害はないわけだし、何より兎を殺すのがめんどい。

ホバリングしたおっさんのスピード舐めんなよってことでその場から離脱したわけだが、腹減った。

あれだね。結局あんまり食べてないもん。

じゃあ何を食うかって言うと木の根っこだ。おっさん今、虫なわけだし木の根っこも食えるでしょ。

とゆーわけで早速地面を掘る。

ほどなくして根っこを発見&ゲット。

いただきまーす！

【ホワイトキラストッグビートルは混乱状態になった】

あれ？　なんでおっさんはこんなところで根っこなんか食べてんの？

あ、やべ……炬燵の電源切ったかな？

いやいやそれを言うならガスの元栓の閉め忘れも……

あーおっばいで癒されてー……

【ホワイトキラストッグビートルは混乱回復力上昇のスキルを得た】

はっ！？

おっさんは今何を……

とゆーかなぜだかソープに行きたくなった。

その後、おっさんは生き物を狩ることなく自生してる植物などを食って生き抜いた。  
最初はなんか変な状態になるけど何回も食べてると平気になってくるのよ。

そんなこんなおっさんがクワガタになって三ヶ月が過ぎた。

【ホワイトキラストッグビートルは麻痺完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラストッグビートルは毒完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠完全耐性のスキルを得た】  
【ホワイトキラースタッグビートルは混乱完全耐性のスキルを得た】

【不殺・特定の状態異常耐性・行動範囲が森のみで三ヶ月生きるの  
特殊条件を満たした。ホワイトキラースタッグビートルはエメラル  
ドスタッグビートルへと変態した】

【エメラルドスタッグビートルになったことで森の加護を得た。以  
降森での行動に補正が付きます】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで木々の声のスキル  
を得た】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで植物成長促進のス  
キルを得た】

朝起きたらおっさんはキラッキラの濃い緑色になってました。

## おっさん、初めて会話する

いやー驚いた。

起きたら緑のおじさん（クワガタ）になってたとか何の冗談よ。

っーかまた変態言われた。

おっさんはダンディなロマンスグレーなのに……

いや、今は緑だからロマンスグレーじゃねーや。ロマンスグリーン？  
とゆーか緑になって何か変わったわけ？

あ、保護色か。

森の中でうんたらかんたら言ってたのはそうゆうこと？

それよりもまた適当に食い物探しますかね。

お、赤い果実はっけーん！

『それ、毒あるわよ』

「いや、おっさんには効きませんから」

毒完全耐性とかゆーの持つてるからね。

この三ヶ月の間に色んな毒性植物を食った結果だよ。

今では一口食べれば「あ、毒ある」ってわかるんだよね。

その他の耐性のおかげでおっさん何食っても大丈夫。

『そうなんだ』

「そうなんです」

『じゃあ、もつと毒が強力な実を作った方がいいのかな？』

「いや、あらゆる毒植物を食った毒マイスターなおっさんの意見を  
言わせてもらえば、この実はそこそこのレベルの毒を持ちながらも  
毒っぱい臭いがしないんだよね。その点は摂取する側としては嵌め  
られた感がある」

『そつか。ならこのままでも生き物を毒殺するのは訳無いのね』  
「そうそう。ま、おっさん以外はね……って誰っ？」

おっさんと今まで会話してたのは誰ですか？  
しかし、周りを見回してもそこには誰もいない。

『クスクス』

なんかおっさんを笑ってるみたいな音が聞こえるがそこにはやはり誰もいない。

「……幻聴？」

寂しいおっさんの心が作り出した。エアなボイスだったのか。  
おっさん的には幻聴よりもきわどい水着のおねえちゃんの幻影が見える方が良かった。

ここで全裸のおねえちゃんじゃないのは、逆にエロさが消え失せてしまうからだ。

森で水着はエロいが森で全裸ではエロさが足りない。

これが分らん奴は性欲に真っすぐな青い小僧だ。

そして「その水着って葉っぱ製ですか？」と考えた奴は誇っていいぞ。お前は立派な戦士だ。履歴書の職歴に戦士と書きなさい。

おっさん？

おっさんはただのオッサンです。それ以上でもそれ以下でもありません。

『幻聴じゃないよ。とゆーか聞こえてたことに私がビックリ』

また声が聞こえる。

どこだ……どこにいらんだ。

声が優しげなおねーさんっぽいからきつと美人に違いない。

「頼むからおっさんに姿を見せなさい」

『こつちよ』

声のした方向に目を向ければそこには先ほど食べた果実のなる木しかない。

『そう、あなたが今見てるのが私』

おっさんが見てる方向には先ほど食べた果実のなる木しかない。

「所詮は幻聴か……」

『いやいやいや！ 私だつてば！ その見つめてくれてる木が私』

木が私つて……

幻聴さんとはんだファンタジー思考によって作られたものみたいだな。

やれやれ仕方ない……

「これか？ これがええのんか？」

おっさんはとりあえず木を舐め回した。

さて、脳内の妖精さんよ。どう反応するんだい？

『や、やめて……まだ樹液は外に出てないの。私、まだ傷がついた経験がないから……』

なんかやたら艶っぽい感じで返してきたな。ここは良いではないかとか言いながら続けるべきか……

一度整理してみよう。

脳内でエアな相手を作り、それを木に見立てて会話し、その木を舐めるおっさん……

うん、気持ち悪いね。

絶対に友達になれないし、友達もいない（変態仲間はあるかも）

「おっさんは馬鹿だっ！」

「え、そんなことないよ。気持ち良かったし」

「植物を満足させて何が楽しいんだっ！」

「なんか……ごめんね？」

「いや、君は悪くない。悪いのは全部おっさんだ」

「元気を出して」

「慰めるなよ馬鹿野郎。優しくされるとおっさん付け上がっちゃうからね」

「あのーちよつといいつすか？」

「あ、はい。何ですか？」

「こつちちよつと光合成に集中してるんで、もう少し静かにしてもらつていいつすか？」

「ご、ごめんなさい」

「いやいや、君はまだ若いから仕方ないつすよ。おーい、誰が一番酸素作れるかの競争再開しよつす」

「うーい」

「おけ」

「任せんしゃい」

「なんか脳内音声が増えた……」

しかも酸素を作る競争とかしてるし。

正直ありがとう。あなたたちのおかげでおっさんらは生きていけます。

そしてごめんなさい。おっさんは二酸化炭素を吐き出すためのダメ生物です。

『なんかますますへこんでるね。大丈夫、ちょっと注意されただけで杉690452さんも怒ってないから』

なんかまた慰められた。

とゆーかおっさんに対して「お母さんもう怒ってないから大丈夫だよ」って近所のお姉さんが言う感じなのはいかなものか。ま、そういうの大好物ですけど。

「さすが脳内音声。おっさんの好みを熟知してやがる」

『さつきから脳内音声って言ってるけど違うよ?』

「はいはい。わかってるわかってる」

嘘ついた子供に「お前嘘ついたろ?」って言っても「嘘なんかついてないよ」って返してくるようなもんだな。

おっさんの脳内は生まれ変わったせいか思考が若々しいらしい。

『いや、私と会話できるってことはあなたそうゆうスキル手に入れたでしょ? 心当たりある?』

む? 何やら必死だな。

「はいはい。例えば何があるのかな?」

『えっと、木々の声ってゆーのが代表的なものだけど……』

木々の声ね。うん、確かそんな感じの起きたら手に入れてたかもね……って

「え、うそ、やだ、まじ？」

『あ、やっぱり？』

こいつぁおでれーた。

木の言うことが本当ならまじでおっさんは木と会話してたわけ？

なら、あの変態行為も……

「色々すまんかった。許してちょんまげ」

『……うん、許すよ。あと、くそ寒い』

なにはともあれおっさんは初めて誰かと会話が出来ました。

## おっさん、大樹と話す

おっさんは今、森の奥へと向かっている。

厳密には奥とかそうゆうのはおっさんにはわかんないけどクドゴリン247526（毒の果実の木）が言うにはおっさんが向かう方角は森の奥らしい。

そしておっさんがなぜ森の奥に行くかと言うと、森の奥には森の木々の中でも長老的な存在がいるらしいからだ。

なんか「樹齢一万年を軽く越えるから物知りだよ」とのことで、年功序列なおっさんのにも話を聞くのは悪くないと思ったからだ。

道中で道に迷いそうだったらそこらにある木に聞けばいい。とゆーか木達はおっさんに結構フレンドリーだ。

曰く、「木仲間以外で話をするなんて滅多にない」とのこと。

全くないと言う奴は全体の三割ほどらしく、時たまおっさんみたいな木々の声のスキルを持つ者と会話したことある奴もいるわけだが、そいつらの話を聞くと、どうやら人間やエルフという耳が長い人間、獣人という獣臭い人間がいるらしい。いや、エルフとか獣人は人間に数えんのか？ と突っ込んだが、どうやら木達にとっては二足歩行、ある程度の知性の二つがあれば人間としてカテゴライズしてるらしい。おっさんがわかりやすく解説すると乳牛も肉牛ももれなく牛ということだ。えっ？ 違う？

それにしてもこの木々の声というスキルは便利だ。

どこに他の生き物がいるのか教えてもらえるし、何よりどの草が食えるとか自分の実は美味しいとかを知らせてくれるのが何よりありがたい。

これで食料を確保するのは楽というものだ。

そんなこんな進んでいくと開けた場所に出た。

そこには陽光を反射し、キラキラと輝く湖があり、その湖の中央にある小高い丘に大樹が聳えていた。

「綺麗だな……」

どこか神聖な空気が漂うその光景に無意識に言葉が漏れる。

おそらく長老的な木というのはあの丘の大樹に間違いないだろう。

おっさんは翅を広げてその大樹の元へと向かった。

エメルドスタッグビートルに変態（相変わらずこの表現は不服だ）して一メートルほどの高さまで飛べるようになったのは果たして喜ぶべきことなのだろうか。

「こんにちは」

大樹の元に降り立ったおっさんは第一印象が大事とばかりに挨拶をする。

いや、まじで第一印象は大事よ？

対人関係なんて第一印象で物事が進むからね。ただし、第一印象が悪いとそこから挽回するのは大変だけど、第一印象が良いところから悪くなる場合は前者よりもかなり早いことも付け加えておく。

『ほむ、こんにちは』

おっさんの挨拶に大樹が返す。

『話は根っこワークで聞いとるよ。して、何をわしに聞きたいのかね？』

ちよいと待ちなさい。

根っこワークって何やねん。ここはツッコむべきか？

いやいや、初対面の相手、しかもかなりの年上にいきなりツッコむとかどうなのよ。

でも、上司が「今の若者はわからなくても人に聞くということがない」ってちよいぐれで愚痴ったりすることから考えれば、ツッコミはしなくともわからないなら聞くべきか。

そもそも大樹も聞きたいことがあるなら聞けよ的なスタンスみたいだしな。

「まず、第一に根っこワークってネーミングは誰が付けたんですか？」

知りたいのはこれだ。

根っこワークの説明？　んなもんネットワークにかかったもんだろ。それを根っこで行うから根っこワークだ。予想でしかないけど多分合ってるはず。

『ほむ、難しいことを聞くのう。根っこワークは根っこワーク。昔からそう呼んどった。特に意味はない』

「簡潔な説明ありがとうございました。お蔭様でよくわかりましたよ」

大樹に対して礼を言う。なんか嫌味に聞こえるかもしれないな。でも納得はしてるんだよ？　意味のない名称なんてあるところにはあるわけだし。これもその一つなのだろう。

さて、次の質問に行こうか。

「それで次に聞きたいことなんですが、ここって何処なんですか？」

ある意味これが一番聞きたいことだ。

他の木々に聞いても同じことが返ってくるだけなのだが、もしかしたらこの大樹なら――

『ほむ、なんじゃ、自分が暮らしてる場所もわからんのか？　ここはミズドリウムの森じゃ』

しかしこの大樹もまた他の木々と同じ言葉を返す。

確かに”ここ”という場所を表す言葉ではあるがおっさんが聞いたのはそうゆうことじゃないんだよね。

「聞きたいのは森の名称じゃなくて、ここが何処の国に属しているとかなんですけど、ご存知ありませんか？」

当然、この質問も他の木々で試している。しかし、返ってくるのは「わからない」ばかりだった。

『ほむ、確かプリオ二公国じゃったかの……五千年くらい前の話じゃが』

知っていた。

大樹は自分が生えてる国を知っていた。ただし、五千年前ではあるが。

五千年つつたら縄文時代とか弥生時代とかまで遡るよな？　もしかして類人猿？　おっさん、歴史は苦手だからわかんない。でもそんなに古い昔の話。

さて、プリオ二とか言うやたら可愛らしい国におっさんは心当たりがない。しかし、もしかしたら過去にあった可能性も否定できない。だが、見たこともない生き物やエルフや獣人ってことから、ここは

ファンタジー世界だという可能性がおっさんの中では一番大きい。  
まずはこの辺を確かめるか。

「地球とか日本、アメリカ、中華人民共和国、アフリカ、ソビエト連邦、オーストラリア、ユナイテッドキングダム・オブ・グレートブリテン・アンド・ノーザン・アイルランド。この中で一つでも聞いたことのあるものはありますか？」

『ほむ……残念ながらわしの記憶にはないのう』

「根っこワーク使ってもですか？」

『ほむ、ちよつと待っておれ……なんじゃったかのう？』

もう一度、今度は一つ一つ聞いてみる。

十分ほどの沈黙が流れ、おっさんの目が空の雲の動きを追っている  
と不意に大樹に声をかけられた。

『ほむ、残念ながらわしの根っこワーク圏内にはわかるものはおらんようじゃ』

ほむ、誰も知らないか。あつ、移った……おっさん、ドントマインド。

まあ、大樹には悪いがあまり期待してなかったけどね。

これでおっさんのファンタジー世界じゃね？　って想いがちよつと大きくなった。ちなみにおっさんの中では最初からファンタジー世界ではば確定している。

けどどっかの誰かが言っていた何事にも絶対はないの言葉を尊重してそうだったらいいなとばかりに地球のどこかだという余地を僅かに残しているに過ぎない。

「わざわざすいませんでした。そういえばなんですけど、おっさん……私は元々人間だったんですけど、ある日大きな黒いクワガタ……

ブラックキラースタッグビートルでしょうか……に殺されて気付いたらその幼生体になってたんですけど、その現象に関して何かわかりませんか？」

わざわざ黒とかブラックってクワガタの前に付けるおっさんはいじらしい存在ではなからうか。

『ほむ、それは興味深い。この森の主的存在であるブラックキラースタッグビートルに殺された人間というのはわしもいくつか心当たりがある』

ほう、詳しく聞きたいものだ。

そして主的存在ということとはつまりブラックキラースタッグビートルはおっさん（クワガタ）の父親クワガタしかいないらしい。

さて、本邦初公開。おっさんの母親の色は灰色である。実際森の中でたまに見かけた両親以外のキラースタッグビートルには実に灰色が多い。

『ただ、森に入って運悪く奴に出会ったがために殺された人という存在はそこそこいるでな。特定は出来ん』

『あ、えっと見た目は四十手前くらいのオッサンなんですけど……』『すまぬが特徴を言われてもむしろにはようわからん。それがエルフや獣人、人間などの種族じゃったらわかるんじゃが個人の特徴は雄か雌かくらいしか……の』

「いえ……」

まあ、それは仕方ないこともな。

何せおっさんだって木を見て個別に判別するのは無理だ。

それが桜か銀杏かはわかっても桜の木の内のあれこれは傷があるなどの特徴がないと厳しいものがある。そもそも意識して見なければ

それはただの桜としてしか見ない。

……ん？ よく考えたらおっさんにはやたら目立つはずの特徴があったじゃないか。

「あ、あの！ ある日突然森の中に現れた人間。そうゆう人物に心当たりは？」

おっさんは気付いたら森の中にいた。

それならば不自然な人物として目立つたはずだ。きつと注目を集めたはず。

『根っこワークで聞いてみよう……ほむ、確かにいたみたいじゃない？』  
「マジですか！？」

いかん。興奮して敬語じゃなくなってしまった。落ちつけ落ちつけ！。

「本当ですか？」

『ほむ、だいたい六百日くらい前にそのような人物がいたそうじゃろっ……』

予想以上に前だったために驚きに言葉が詰まってしまう。

『ほむ、すまなんだが目撃したものもよく覚えておらんらしい。何せ紅葉の前じゃったみたいだし、いきなり現れたと思ったらふらーっと歩き出して殺されてしまったらしくてのう』

「そうですか……」

夢だと思って歩き回った結果、でかいクワガタに出会って死んだわ

けか。

他人（他木？）から見たということを書いて考えるとなんとも  
マヌケなことだ。

まあいい。切り替えよう。

なぜならおっさんは最近加齢臭がきつくなってきた身体から入浴剤  
の森の香り（エメラルドスタッグビートルになってからふと嗅いで  
みました）みたいな匂いのクワガタになったのだから

第二の人生、この身体で楽しんで生きていこうじゃないか。

## おっさん、大樹と話す（後書き）

ヒロインを出せる気配がない……

あと数話は出てきません。とゆーかクワガタと木だけであと二、三話やる予定です。

ここだけ聞くと昆虫の観察日記みたいですな。

プロットらしきもので流れはラストまで大体決まっていて、あとは思いつくままに肉付けって感じで書いてます。

早くヒロイン登場まで書きちゃいたいけどペースが上がらない……

ああ……早くオッサンに真っ当なセクハラさせてえよ……

愚痴ってすいません。

読んでくれてありがとうございます。

出来ればこれからも拙作にお付き合いくだされば嬉しいです。

## 続おっさん、大樹と話す

『さて、わしからおぬしに尋ねたいことがある』

唐突というわけでもないが、大樹がなにやら物々しげに声をかけてくる。

こうゆう時って物語だと得てして厄介事に巻き込まれたりするんだよな。おっさんそうゆうのノーサンキューなわけよ。

「黙秘権を使用します」

どうだ！ きつぱりと断ってやったぜ。

おっさんはノーと言える日本人。上司が帰りに呑みに行こうと言っても奢り以外では行きません。奢りなら限りなく百パーくらいで参加するけどね。

ちなみにおっさんは25歳以上の女性（発育は平均以上）でないと興味がないので「新入社員の若い女の子達も来るんだよ」と言う誘い文句に踊らされない。ただし、「中川さん（36歳・既婚）も来るみたい」にはほとほと弱い。中川さん、美人で胸がでかいからね。おっさんの好みどストライクなのさ。人妻？ おっさん的にはその響きは世界一のバイオリニストの演奏並におっさんの心を奮わせます。

ただ、肩にポンと手を触れただけで「セクハラですよ」と言われるのはいかななものか……

その癖、他の社員の男（美形）に同じことされても「なに、偉そうにしてんのよ」とかまんざらでもない顔で言うんだよね。

不快感を感じたらそれすなわちセクハラ。日本政府よ……ちゃんと境界線を決めてくれ。あつ、今居るのはたぶん日本じゃねーからおっさんには関係ねーか。

『して、何を尋ねたいかと言うとじゃな』

ん？ あれ？ おっさん黙秘権使ったよね？  
なんで話が進んでんの？

『人という種についてじゃ』  
「はあ」

言っちゃったよ……

こっちが黙秘権使ってるのに聞いてきやがったよ。  
これ、もう聞くしかない？

「どうゆう事ですか？」

『ほむ、人という種になりたくはないかということじゃ』

よくわからん。

でも、なりたいかと聞かれればなりたいわけだが……

「なれるんですか？」

『可能性の話じゃが……わしが見たところ、おぬしには人という種になれる可能性が高い』

「どこら辺がですかね？」

『その前に人という種がどうやって誕生したか知つとるかの？』

人がどうやって誕生したか。

これは歴史が苦手なおっさんでもわかる。

猿から類人猿。そして類人猿から人へと進化していくことで人が誕生したはずだ。いわゆる進化論だな。

まあ、アメリカなんかじゃ神様が全て造ったと言う創造論を信じて

る奴がかなりいるらしいが、おっさんは断然進化論を信じてる。

「えーと、神様が造った。または別の生き物から進化した。この二つが考えられますが、私は後者だと思います」

『そう、それが正解じゃ』

正解って言われた。クイズだったの？

『人という種は進化によつて元よりも優れた力を得た。まずはじめに妖精の中から進化した最初の人という種が現れ、自らをエルフと名乗った。次いでエルフが作り出した無機物に命を吹き込んだ物、つまりはゴーレムから人に進化した者が現れ、ドワーフと名乗った。次に四足の獣の中から進化した者が生まれ獣人と名乗り、その次は水の中で生きる者から進化した者は魚人と、最後に二足で歩行する猿は人間と名乗ったのじゃ』

「そうですか」

だからなんだよって話。

「フーか人間はやっぱり猿から進化したのな。獣から進化した点では獣人とやらと同じだが、きつと獣耳がないのだろう。あとは、見たことないからわかんね。」

『その進化した条件はなんじゃと思う？』

「さあ？ わかりません」

『少しは考えて欲しいんじゃないかな。まあ、よい。人に進化したものにはある共通点があったのじゃ。それは……知恵と魔力。そしてその魔力を扱う技術じゃ』

「なるほど」

わかったようなわからないような……

で、それがなんでおっさんが人になりたいかどうかの話に繋がる？

『わしはおぬしを見て、言葉を交わした。その結果、おぬしは人と同じような知恵を持っているとわかった。いや、おぬしの言葉を信じるならば人であった存在がスタッグビートル種へと知恵をそのままに生まれたことになる』

「……要約すると？」

『わしは長年生きてきた。そのうえで、初めて人へと進化できる可能性を持つ虫を見つけたのじゃ。じゃからおぬしが人に進化したいと言つのならば、手を貸そうと思つての』

「なんでそんな一文の特にもならないことを？」

ぶっちゃけ裏があるだと勘繰つてしまう。

おっさん、これでもドロドロした大人の世界にいたからね。

こうまで親切にされることに抵抗感があります。

『ほむ……いいじやろう、話してやろう。まず、最初にエルフに進化した者はタファンの森という場所に現れた。ドワーフもタファンの森が最初じゃ。次に獣人はバコタの森で生まれたのじゃ。魚人はどっかの海。人間はテロンの森の猿が進化した種なのじゃ』

どこで進化したとかどうでもよくね？

『で、根っこワークで一年に一度超長距離根っこワーク会議があつての』

もはや根っこワークはどうでもいいんですけど。

『あいつら何年経つてもそのことを自慢げに話して悔しいんじゃ！』

……は？

『じゃからおぬしを進化させて、新たな人の種に立ち会うことで自慢したいんじゃない。じゃから、な？ 一緒に頑張ろ？』

こいつ、他の木に自慢してーだけかよ。

「やってやってもいいけど、世の中はギブアンドテイク。おっさんが進化することであんたは他の木に自慢出来る。だけどおっさんにあんたは何をくれるわけ？」

おっさんの中で大樹のランクが下がったことで発言がかなりおざなりになった。

ちなみに人に進化出来るならそれだけでおっさんには利益がある。しかし、相手にお前が言うから仕方なく進化してやるんだぜってスタンスになることによって恩着せがましく、もっと色々な物を引き出そうとこ狡い活動中です。

『ほむ、それは進化できてから決めようではないか』

……腐っても（物理的には腐ってないけど）一万年以上を生きる大樹か。

ここです承すれば、進化出来たとしても「ほむ、進化できたんならそれで十分じゃないかのう」とかい出し恐れがある。なんとしても言質はとつかねーと。

「なんか役立つもんくれ」

『とは言っても、所詮わし木じゃし』

「一万年生きてるならなんかあるだろ」

『ほむ……そうじゃな。ならばわしの力を与えよう』

「与える？ どうやって？」

『わしの力を濃縮して実を付けるんじやよ』

おっさんには大樹が不敵に笑ったような気がした。

## 続おっさん、大樹と話す（後書き）

まず初めに、この物語はファンタジーです。

猿から人に進化するには何十年、何千年、何万年かかったとか言うツツコミは聞きません。

なぜならファンタジーだからです！

大切なので二度言いました。

納得できない部分はこれewithどうか誤魔化してください。

なお、ファンタジーでも説明出来ないような疑問があれば質問はありです。答えるかどうかは別ですが……

ただ、出来る限りは答えたいと思います。

作中に出てきた中川さんですが、私の書き方のせいで感じ悪い人に見えるかもしれないですけど、実は悪いのは全部オッサンだったりします。一人称なのでそこらは書けません、悪いのはオッサン。

これだけはわかって欲しい。

ちなみに裏設定では中川さんはオッサンと同期入社。

機会があればそこらも書こうかな……

## おっさん、修業する

その後、大樹によってプロデュースされたおっさん進化計画が実行に移された。

人になるために必要な物は、知恵・魔力・魔力を扱う技術の三つ。その内、おっさんは知恵の面はクリアしている。

しかし、魔力に関してはさっぱりなのでそこを一から習得していくことになった。

以下はおっさんの魔力を感じられるようになるための修業のメモリアルです。

『まずは体の内に眠る魔力の波動を感じるんじゃ』

「……具体的な説明を求めます」

『カーッとやって、グーっとする感じじゃ』

「カー……？　グー……？　擬音って本人以外にあんまり伝わんねーよ。おっさん感覚派じゃなくてわりと論理派なところあるし」

『ほむ、そうじゃのう……己の中にあるドロドロしたものを吐き出すかんじかの？』

「わかった。部長のハゲーツ！　ツラの癖に偉そうにしてんじゃねーよ！」

『言葉の意味はよくわからんが多分違うぞ？』

「あんたの言った通りにやっただけど？」

『違う。魔力はもっと熱いもんじゃ。こう……人で言う情熱的なパトスって奴なんじゃ！』

「それならおっさん得意だわ。すう……イメクラで赤ちゃんプレイとか女教師プレイがしてー！！」

『それも違う』

などという、客観的に見ればなにやってんのこいつらの押し問答を三日ほど繰り返した結果、

おっさんは

魔力を

感じられなかった。

「ーか当然だよ。

おっさん今まで魔力とか言うのと無縁だったし、なにより教師役の大樹がクソの役にも立たない無能だ。

おっさんは悪くありません。

『ほむ、おぬし才能ないのう』

くおっ、面と向かって言われるとは……

はいはい、正直「魔力を感じるくらいなら一日で出来るようになるじゃろ」とか言われていい気になってましたよ。

薄々、おっさんには才能ないなって思ってた。

しかし、あれだな。へこむわ。俯くほどじゃねーけど、暗い気持ちにさせられる。

『落ち込むでない。内的魔力はダメじゃったが、まだ外的魔力があるわい』

大樹の言葉によっておっさんの暗かった視界に一筋の光が差し込むような幻が見えた。

「その話を詳しく」

『今までの修業は己のうちにある魔力、つまりは内的魔力を感じるためのものじゃった。しかし、他者から放出される外的魔力を吸収し、己の物とする。利点は魔力の波動がわかりやすく、扱いやすい事じゃ』

だつたらなんでもっと早く教えてくれないのかと思うが、教えなかった理由つてのもあるのだろう。利点があるってことは欠点もあるだろうし。

「よし、教えてくれ」

だがおっさんに迷いはない。

なぜなら早く人になりたいからだ。

いやー、声に出してからイメクラ行きたくてたまんねーのよ。もうおっさんの体内時間で四ヶ月は行つてねーもん。

でも、クワガタとお医者さんごっこがしたい女性がいるだろうか？

クワガタなおっさんを鞭でシバき倒しながら罵倒してくれる女王様がいらっしやるだろうか？

もしかしたら世界のどこかにいるのかもしれない。だけど探すのはめんどくさい。

だからおっさんは人にならなければならない。

『ほむ、覚悟を決めた良い目じゃ。しかし、難しいぞい？』

「望むところだ」

きつと大樹には今のおっさんの姿がイケメンに見えてるに違いない。

気持ち真面目な顔してっし。

『外的魔力を扱う上で、まずは魔力の色について説明しようかの』

そう言つて大樹が説明してくれたことをおっさんなりにまとめてみると

魔力には五色の色がある。

それは赤・青・黄・緑・無色の五つ。

赤は火を司り

青は水を司り

黄は地を司り

緑は風を司る

無色はそのいずれにも属さないものであるが、何物にも染まっていないために応用性の高い代物である。しかし、その力は他の四色に比べれば圧倒的に小さい。

あとは赤は青に弱く、青は黄に弱く、黄は緑に弱く、緑は赤に弱いというジャンケンのな相性もあると教えられたが、そいつは今あまり関係ない話なのでどうでもいい。

外的魔力を扱う上で最も大事なのが無色の魔力だ。

これは太陽から降り注いでいるらしい。ちなみに月からも魔力が降り注いでいて、こちらはかなり純度が高いそうだが太陽と比べると千分の一くらいの量らしい。

つまり、おっさんが外的魔力を扱うためには――

『イメージじゃ。己の葉緑体に光を取り込むかのように魔力を取り込むイメージじゃ』

無茶を言いなさる。

おっさんはひなたぼっこはしても光合成はしたことありません。

『こつ……太陽よ、わしに力を分けてくれなスタンスで挑むのじゃ』

どこの野菜人だよ。

いや、あれはダジャレ好きの人が元祖の技だったっけ？

「太陽よ、おっさんに力を分けてくれ」

とりあえずやってみた。

物は試して昔の人も言ってたしね。

……しかし何も起こらない。

「うおおお！ 猛ろ！ おっさんの葉緑体！」

当然、何も起こらない。

「太陽様、なにとぞこの矮小なるおっさんに力を分け与えてください」

下手に出てみた。

だが、何も起こらない。

「いいぜ。いつまでも付き合ってやる」

こりゃ長期戦だなおっさんは覚悟を決めました。

あれから半年ほどの時間が経った。

その間のおっさんの視線はほとんど空にあった。

晴れの日には太陽を睨み、曇りの日は邪魔だとばかりに雲を睨みつけ、雨の日は天然のシャワーを楽しんだ。

いや、全然冷たく感じねーの。しかもおっさん、洗車して撥水コートしたての車のごとく水と汚れを弾きまくり。湖に浸かるのもいいけど、シャワーは痛快だ。毛穴までしっかりクル。大粒の雨の打撃が心地いいです。

#### 閑話休題

この半年間、何度となく外的魔力の吸収を諦めようかと嘆いた。

その度に明日とともに現れる太陽さんが「小僧、貴様はやはりそれっぽっちの存在か」とやたら渋い声で話しかけてくる（完全なる幻聴、妄想の類）

そんなところがおっさんの負けん気をくすぐる。

いつしかおっさんは日の出から太陽さんを出迎え、お願いしますの  
声と共に日の光を浴びながら魔力を吸収するイメージを持ち続け、  
日の入りでありがとうございますと言いながら太陽さんを送り出す  
ようになった。

まあ、結局何が言いたいのかというと努力は人を裏切らないってこ

とだね。

【エメラルドスタッグビートルは無色の魔力吸収のスキルを得た】

これだよ。ある日ピーンと久しぶりのこの声だよ。

もうおっさんしばらくは太陽見なくていいーや。

何がお願ひしますだよ。そして何がありがとうございますだよ。所詮、おっさんと太陽の関係は勝手に魔力を排出してる側とそれを有効利用させてもらってる側ってだけでしかない。

太陽が地上の一生物でしかないおっさんをピンポイントで見てるわけもねーわけだし。

なにより、おっさんはオッサンであってまだジイさんじゃないわけよ。早寝早起きは柄じゃねーわ。

んじゃ、寝よつと。

『よし、弟子よ。修業を次の段階に進めるぞい』

最近、すっかり師匠気取りな大樹が話しかけてくる。

スキルを得たことでテンション上がって報告したのは失敗だった。

「いや、おっさんは寝る」

もぞもぞと巣に入る。

築一万年強の木造。たまに話しかけてくるけど住み心地は悪くない。そんな物件。

「大樹。休息のために十日ばかり時間をくれ」

そんなことを言いながらおっさんは意識を睡眠モードへと移した。

まどろみの中に聞こえた『いや、明日から始めるぞい』という声は  
寝てて聞こえなかったということにしよう……

おっさん、修業する（後書き）

要約するとオッサンが変なこと考えながら半年間ひなたぼっこに熱中した話でした。

次話で進化かな……

ある意味オッサンの進化までが序章です。

## おっさん、進化の条件満たす

修業したがりの大樹をはぐらかし続けて三日。

大樹がうるさいために予定より短い期間となったが、鋭気を養うことは出来たため、おっさんはいよいよ魔力を扱う技術を修業する。

と、その前におっさんも半年間ずっと空ばかり眺めていたわけじゃない。日の入りから日の出までは約十二時間くらいあるので、その間に大樹に色々聞いたのだ。

その中から二つ説明せねばならないものがある。

一つはスキルというものについてだ。

とは言っても詳しいことはよくわからないらしい。

だがしかし、スキルを得るには修練や経験がものをいうらしいということはわかっている。そしてスキルを得た瞬間にいつでもそれに即した行動をとることが出来る。

例えば、必死で剣を振りつづければ剣術基礎スキルを得る。これは修練により得たスキルであり、今まで野菜くらいしか切れなかったのに直径十センチくらいの木なら断ち切ることが出来るようになるらしい。更に色々な修練をつめば剣術スキルになり、剣豪スキルに変わり、剣鬼、剣聖と変化していくみたいだ。また、その過程で剣技という必殺技を得ることもあるのだが、これもスキルとしてカウントされる。

あとはおっさんが持つてる毒とかの完全耐性。こいつは修練の面がないとは言えないが、基本的には経験から会得するスキルだ。やたら毒を食った結果、体の中で「これ毒あるじゃん。分解しようぜ」ってな具合にやってくれてるみたいだ。

習得するスキルの種類は常時発動型と意識発動型、そして種族特有型の三つがある。

内容は読んで字のごとくであり、前者の二つは誰であっても会得出来ると言われている。最後の種族特有型はその種族なら最初から持っているが、他の種族の者が会得するのは難しいみたいだ。

ちなみにおっさんの木々の声のスキルは多分種族特有型であり、他の種族は大樹曰く森にずっと住み着き、植物に話しかけ続け、人格的に優れた者が会得することがあるらしい。このスキルはエルフとか獣人の中に一世代に必ず一人は会得する奴が出るみたいだ。

さて、簡潔ではあるがこれがスキルの説明だ。なにかあれば後ほど詳しく語る部分もあるかもしれない。

次にスキルを得た時に聞こえてくる【】の声について軽くだが説明しよう。

とは言っても難しく考えるようなものではなく、世界を見守っている神様の声だという説が一般的（木達の中で）だ。人ならば違う見解を示していたりするのかもしれないが、おっさんもこれでいいと思う。

とゆうかこれ以外になにがあるの？ って感じ。おっさんの妄想って言われればそれまでだけど、大樹も昔は聞こえたって言ってるからおっさんの妄想説は否定させていただく。

ファンタジーなら神様が実在してるとかは十分有り得る話だ。

以後、この声のことを天の声と呼称することにしよう。

では、魔力を扱う修業編に行こう。

「ふうう〜、こおお〜、ぬううん〜」

湖に浸かりながら唸るように腹の底から発声する。気分的には気功の達人みたいに気を練っていくような感じだ。あくまでも気分だけの問題であって大した意味はない。

さて、なぜおっさんが湖に浸かりながらこんなことをしているのかと言うと、魔力を扱う技術として広く知られているものの内の肉体活性を会得するための修業の一貫だからである。

肉体活性。つまりは魔力を使つてのドーピングだ。これが出来れば肉体の限界の枠を越えた動きも可能となる。ただ、見た目や実感的なもののがわかりにくいために湖に浸からせてもらつてる。

とゆうのも目には見えない魔力の波動というものであつても、流体である水には波という形で影響を与えるからだ。視覚的にはわかりやすい。

そして今現在どうなつていいのかと言うと、おっさんを中心として波が立っているわけだ。

……おっさんが動くのにあわせてだけどね。

水に指を突っ込んだら波打つ。これは当然のことである。

ただし、魔力の波動で波打てばもっとすごい感じになるらしい。

つまりはおっさんはまだ魔力を使つての肉体活性に成功してないわけだ。

「はあああ……ダメだ、出来る気がしない」

『まだ一日目じゃ。諦めるには早いぞい』

「なんかコツとかないわけ？」

『コツと言つても、体内に吸収した魔力を体中に行き渡らせるだけの話じゃ』

それが簡単に出来たらコツとか聞きません。

つーが無理。どだいおっさんには無謀な挑戦だ。

『まずはじめに吸収した魔力が今どこにあるかはわかるじゃろ?』

もう諦めてバックレようかと思っていると大樹が今更なことを聞いてくる。

吸収した魔力の存在はなんとなく感じられる。なんか飴玉を丸呑みしたみたいな変な感じが体内の一部分にあるからだ。

「わかるよ」

『それを体中に送ってやればよい』

「だから、それがわからんのよ。どうやってやればいいわけ?」

『バシユツとやってギューンじゃ』

抽象的過ぎる……

もういいや。自分で考えてなんとかしよ。

イメージ。イメージが大切だ。

魔力を体中に行き渡らせるイメージ。

しかし、魔力とは無関係だった生を謳歌していたおっさんにはちょっとわかりにくい。

ならば魔力を電力に置き換えてみよう。そう、つまり今のおっさんは電池を積んだおもちゃだと思うことにする。

今はおもちゃに電力が伝わっていない状態。だから一切おっさんは動けない。

おっさんの動きによって波立つ水が静まってくる。

そして電池をプラスマイナスきちん確認した上で差し込むと導線を通っておっさんの体に電気の道が通る。

そんなことをイメージした。

すると、おっさんの周りの水が波立ち始める。徐々にその波は大きくなっていく。

『ほむ、出来たようじゃの』

大樹からも合格をもらった。

これで、おっさんは、人へと……進化する！

『さて、次じゃが……』

ですよねー。

肉体活性が出来ただけで進化出来たら苦勞しませんよねー。天の声も聞こえねーし。

『魔力を使ったスキルを使用するのじゃ』  
『なるほど』

『はつきり言うところが一番難しいぞい。なにせ、使いたいスキルの明確なイメージがなければダメなのじゃ。人の間では弟子をとつたりしてスキルを伝えていくなどしてるそうじゃが、わしにはおぬしに伝えるべきスキルがない』

魔力を使ったスキルっていうと魔法か？

まあ、木がそんなもん持ってたらそれだけですげーわ。

それにしても魔法か……魔法ってステッキとかコンパクトミラーがないと使えないだろ。あ、これは魔女っ子の話か。

っーかよく考えたら魔法のアイテムとかあっても持てねーわ。

とりあえず、なんか魔法的なものをイメージすればいいんでしょ？  
どうすっかなー。

あ、やべ……思考がかめ〇め波にしか辿り着かねーわ。魔法ではな

いけど魔法的な感じだしな。

おっさんも男の子ってことだね。

「かーめー〇ーめー……はーっ!!」  
ジュルアーツ

え、うそ……なんか出ちゃいました。

おっさんの目の前の湖の水が割れ、それでも止まらずにかめ〇め波は突き進む。

つてやべーよ!? このままだと他の木とかにぶつかる! かめ〇め波よ、消えろー!!

おっさんの願いが届いたのかかめ〇め波は木に届く前に消えてくれた。

ふうっ、なんとかなったか。

【エメラルドスタッグビートルは魔力波のスキルを得た】

【エメラルドスタッグビートルは進化の条件を満たした。 進化するか?】

天の声まで聞こえた。

なんか進化するか? とかやたら馴れ馴れしいな。

しかしどうやらおっさんは進化できるようになったらしい。

『まさかこんなに早く習得するとはのう……おぬしには魔力を扱う才能があつたようじゃの』

「……それほどでも」

他に比べれば時間がかからなかったのは確かだが、こんなんでいいの?

『よっぽどスキルをイメージする力が強かったに違いないわい』

それはあるかもな。

昔は胸が熱く燃えたものだ。いや、今もなお胸を熱くさせる作品だ。

『ならば、次の修業なんじゃが……』

「あ、ちよい待ち。おっさんもう進化できるよ」

天の声は本人にしか聞こえないため、大樹は次の修業をはじめそうになったので止める。

『え、嘘……マジ?』

「マジだ」

『まさか本当に進化出来るようになるとは……』

なんか聞こえたような気がするけど、気にしないでおこつ。

【進化するか?】

おっと、再度天の声から催促がかかった。

悩む必要はない。

おっさんは天の声に高らかと宣言した。

「進化する!」

そう宣言すると同時におっさんの体が熱くなった。湖に浸かっていたためにおっさんの濡れた体から水が水蒸気となって蒸発していく。頭がフラフラとしてきた。

呼吸も、心臓の鼓動も早くなっていく。

ついにおっさんは意識を手放した。

## おっさん、進化の条件満たす（後書き）

書き終わってから、ふとクワガタに心臓ってあるのかと疑問に思ってしまった。

調べた結果、どうもないらしい。似たような働きの器官はあるみたいだけど……

でも、あえて書き直したりはしないです。

なぜなら主人公もクワガタには心臓がないと知らないからです。似たような器官（背脈管というらしい）を心臓と勘違いしていると思われるってください。

おっさん、進化後の姿を見る

暗い視界

奥までどのくらい遠い距離があるのか、それともすぐ近くにあるのか  
そんなことすらわからない闇の世界

何も見えず、何も聞こえない

だがそこに何者かの気配を感じる

「あんたは誰だ？」

問い掛ける言葉に返答はない。

「おっさん、話し相手が欲しいんだけど？」

やはり何も答えてはくれない。

もしかして気のせいなのか？

よく心霊番組とか見た後に眠ろうと布団に横になった時に何者かの  
気配を感じてしまうことはないだろうか？ おっさんはよくあるタ  
イプだ。

だから今回もそんな感じのアレなのかもしれない。

沈黙の時間が流れる。

< ■ちた ■星 ■ ■つ >

何者かが言葉を発した。

どうやら何者かの気配はおっさんの気のせいではなかったようだ。しかし、不意打ち過ぎてよく聞き取ることが出来ない。

「もう一回言ってくれ。ワンモアセイプリーズ」

< 落ちたる星は二つ >

正直意味不明だ。

こいつは何を言っているのだろうか。

「もう少しわかりやすい言葉を頼みます。オッサンが皆物知りってわけじゃないんだからさ」

< 一つは強き光を放ち、もう一つは鈍く光る >

「なあ、何言ってるの？」

< 強き光を放つ星は混沌を導いた >

「聞けて」

< 鈍き光を放つ星は新たなる道を拓いた >

「おいこら、おっさんを見捨てるんじゃない。含蓄はないかもしれないが時たまいいこと言っただぞ？」

<混沌を導きし星にはその存在が混沌で身を滅ぼさぬよう既に悪意から己を護る最強の盾を授けた>

もついいよ。

どうせ「このオッサン、マジうざーい」とか思ってたんだろ。

言っとくけどね。おっさん、女子高生とか全然興味ないからね。

諭吉三枚でどう？ とか言われても断固跳ね返すから。っーか説教するから。

英世さん一人の超安値だとしても……行っちゃうか？ いやいや、行かねーよ。むしろ勃たない。あ、別に歳のせいとかではなくて性癖的にノーサンキューなんです。

<故に新たな道を開拓せし星にはその存在が途切れぬよう再生の泉を授ける>

なんのことやら。

<二つの星は交わりて互いを滅ぼさんとす>

<地上で輝ける星はただ一つなり>

<最後に輝くのは強き光か>

<それとも鈍き光か>

<世界は星の答えを待っている——>

【エメラルドスタッグビートルは新たな種虫<sup>ムシヒト</sup>人に進化した】

【虫人は再生の泉のスキルを得た】

【虫人は昆虫形態のスキルを得た】  
インセクトフォーゼ

【虫人は千里眼のスキルを得た】

【虫人は剛力のスキルを得た】

■ ■ ■

「んう……」

目を開けるとそこには透き通るような青い空が広がっていた。

『おお、目覚めたようじゃな』

聞き慣れた声が聞こえて来る。

声のした方へと顔を向けてみると顔の右側が水に浸かってしまう。

「げほっ、ごほっ……うえっ、気管に入った」

慌てて起き上がり、手を口へと当てて咳込む。

そう、手を口に当てたのだ。

クワガタだった体では出来なかった行為。

口から手を離してまじまじと見てみる。

指は五本。関節の数も人間と一緒だ。

ただ、その手の甲や腕には無骨なエメラルド色のガントレットのよ  
うなものが接着している。

次に体を見てみる。

こちらはガントレットのようなものと同じ色の鎧みたいなものを着ていた。いや、この鎧みたいなものこそがおっさんの体のようだ。だって、股間に赤黒いカブトムシの頭部が付いてるからね。

クワガタだったのにカブトムシが付くとはこれいかに。

足も同じく脚甲のようなもので覆われており、どこの戦士やねんと思わなくもない。

手の平や足の裏、太股の内側などは装甲みたいなものに覆われておらず、やや赤みがかった薄い黄色の皮膚が見える。感触も色も人間だった時のものと変わらない。いや、ちよいと肌にハリがあるかもな。

つーか顔は？

顔はどうなってるの？

おっさんは水面に自分を映して見てみた。

そこにいたのはどこぞの特撮ヒーローの方ですか？　と思ってしまいきそうな存在。

顔はフルフェイスの兜のようであり、その丁度人間の目のある位置に切れ長の鋭い赤い目らしきものがある。んでなぜか口の周りだけ剥き出し。エメラルド色の頭の頭頂部にはクワガタの顎を模した二本の角が生えている。

もう一度言っぞ、どこの特撮ヒーローやねん！

え……嘘。これが虫人とやらの姿？

つーかこれで人を名乗るわけ？

あ、でもちよつとかつちよいいかも……

でもでも、下手したら悪の怪人に見えなくもないかも。

うーん、この頭ってヘルメットみたいに取れたりすんのかな？

……無理だった。

つーかそれより股間っ！

何か隠すもの探さないと……

『三日も眠つとるから心配したぞい。もう大丈夫かの？』

おっと、大樹の存在を忘れてた。  
つーか……

「そんなに眠ってたのか？」  
『そうじゃ』

どんだけ寝てるんだよ。  
とゆーかあれは夢だったんだろうか。

『それにしても無事に進化出来たようじゃの』  
「ああ。とりあえずなんか下半身を隠せるものないか？」  
『すまんが葉っぱくらいしか……』

オーマイゴッド！  
んでも無いよりマシか。  
そして大樹から一番大きな葉っぱを受け取り、下半身に当てて蔓で  
固定する。  
これでひとまずは安心だ。

「ふう、恥ずかしかった……」

露出狂でもないのに下半身丸出しはきついものがある。  
おっさんは衣食住足りてる日本人なわけだしな。

『それにしても……けつたいな存在になったのう』  
「カッコイイじゃん」  
『ほむ、本人が言うのならわしがどうこう言うべきではないな』  
「そうしてくれ」

そう言っておっさんは湖から出て肩を回して歩いたり、走ったり、スキップしてみたりと体の動きを確かめてみた。  
うん、久しぶりに二本足で活動したけど違和感とかは全くない。

「絶・好・調っ！」

無駄に叫んでしまった。

『ほむ、それは良かった。では、約束通りにこれをやろう』

大樹がそう言っていると遥か頭上からグレープフルーツ大の紫色の果実が落ちてきた。

それは万有引力に乗っ取り、かなりのスピードで地面に落下したにも関わらず一切傷が付いていない。  
なにこれ……めっちゃめっちゃ怪しい。

「これは？」

『食べればわかる』

ますます怪しく思うが、さすがに今更大樹がおっさんをどうこうしようとは思っていないはず。

とゆーか毒でも大丈夫だし。

そう思いたった時不安は消え、果実を一口口にしてみる。

果実を一口噛むと甘酸っぱい果汁が口の中に溢れる。ぶっちゃけうまい。

貪るように一個を完食してしまった。

【虫人は斬撃無効のスキルを得た】

食い終わったと同時に天の声が聞こえた。

『どうじゃ？ うまくいったかのう』

「これって……」

『わしが長い生の途中で伐採されないために身につけたスキルを実として落としたのじゃよ』

そんなこと出来るのか？

いや、実際やったんだから出来るんだろうな。

それにしても斬撃無効とは…… 木としては生唾を飲み込むほど欲しいスキルではなかるうか

『今更わしを伐採しようとする酔狂な奴もおらんから気にせず受け取ってくれい。おぬしがわしの我が儘に付きおうてくれたこと本当に感謝するぞい』

「いや、こちらこそ色々教えてもらって……」

『ところでじゃが！』

大樹に礼を述べようとしたところ、遮るように大樹が割り込んできた。

「……………なに？」

せつかく礼を述べようとしたところを遮られたこちらは若干不機嫌だ。

つーかおっさんの感謝の言葉を聞けよ。

なんかモヤモヤすんじゃない。

『おぬしが起きる前に臨時で超長距離根っこワーク会議を開いて他の木に自慢したら、皆して嘘じゃとか言いおるんじゃない』

「……で？」

まあ、なんとなく先の展開が予想出来るが。

『じゃから他の木におぬしの姿を見せてやってくれんか？』

大樹の願いにどう答えるべきだろうか。

進化出来たのは大樹のおかげだし、願いを聞き届けてあげるのはやぶさかではないが、めんどいんだよな！。

「保留で」

『そこをなんとか』

「えーでも……」

『タファンの森の大樹だけでいいんじゃない？』

タファン？

えーと、確かエルフとドワーフの生まれた森だっけか。つまりは一番自慢できる立場にいる奴ってことか。

『別に期限は定めん。ただおぬしが生きてる間にタファンの大樹に会ってくれば良いのじゃ』

結局おっさんは大樹の願いを聞き届け、タファンの森の方向へと旅に出ることになったのだった。

## おっさん、進化後の姿を見る（後書き）

さて、オッサンの進化後の姿はどうでしたでしょうか。

私の中では

クワガタ系仮面ライダー＋ビーファイターのクワガタ＋ライダーマン  
そしてライダーで言う装甲が無い部分が肌って感じみたいなビジュ  
アルです。

最初は完全なるライダー系の容姿を想像してたんですが、やはり『  
人』なので『人』の部分がなくちゃねってことで今のイメージにな  
りました。

まあ、あくまでも作者のイメージなんで細かい部分は読者様のイメ  
ージで考えてもなんら問題ありません。

ただ、鎧みたいなの着てて、頭にクワガタの顎みたいな角がある、  
エメラルドグリーン。この三つだけは外せません。

さて、あと五話以内にヒロイン出せるかなー？

とゆーかヒロインを出す前にあらずじをきちんと書こうと思います。  
とゆーのも投稿するために適当に書いたものなので……

## おっさん、人と会おう（前書き）

今回、会話文がちょっと読みづらいかもしれませんが。ニュアンスだけでも読み取って頂ければ幸いです。

## おっさん、人と会おう

大樹の願いからタフアンの森に向かうことになったおっさん。

めんどくさいけど、生きてるうちに行けば期限は定めないらしいし、ゆっくりと行こう。

そう思ったおっさんはクワガタとして生まれ育ったミズドリウムの森を散歩するように歩いていく。

インセクトフォーゼ

おっさんのスキルの一つにある昆虫形態を使えば前のクワガタの姿になることが出来るため飛ぶことも可能だったのだが、せつかく二本足で歩けるようになったのだ。この感動が続くうちは歩きたい。

途中で出会った肉食な動物達からは隠れて森の出口（便宜上そう呼ぶ）に向かっていく。戦ったりしないのかって？ 理由がないのに喧嘩を吹っかけるとか好戦的じゃないおっさんには無理な話だわ。戦わないで済むならその方がいいに決まってる。とゆるーく脳内で快楽に変換出来ない痛みは御免被る。

大樹から聞いたらしく、歩いていると色々な木々からおっさんが人へと進化したことへの祝福の言葉やこれからの旅路へ対しての激励の言葉がかかる。

うう……皆なんてええ木なんだ。優しくされると泣きそうになるな。年取ると涙腺が緩くなつて困る。

おっさん、感動物にすこぶる弱いんだよ。

途中から見て内容が全然わかんなくても、最後の方だけ見て泣いたことなんてしょっちゅうある。

特に養子の子が自分は養子だから愛されていないと思い込んでたけど実は養父母にすごく愛されてた、みたいなシチュエーションにはすつごく弱い。

……こんな話はどうでもいいか。

む、そろそろ出口みたいだ。

そっぴや初めて森の外に出るな。

どんな世界が開けているのか実に楽しみである。

『あ、そこ危ないですよ』

「へ？ のあつ！？」

『人間がなんか仕掛けてましたから……って遅かったですね』

現在、おっさんは網に捕らわれた状態で宙吊りになってます。

これ、忍者とかかくせ者捕らえるための罠に似てんな。

『大丈夫？』

「あ、へーきへーき」

仕掛けを施された木がおっさんに話かけてくる。先ほどのちょっと遅い警告もこの木のものだ。

「獲物がかかったどーっ！」

「よっしゃー！ 久しぶりに肉が食えるべ」

「わーのしかげがよかったんだがらな」

「オラの戦術眼がよかったんだべ」

ほどこに訛りのある言葉で現れたのは四人の屈強な男達。

全員、皮の鎧に身を包み込んでおり耳とかの諸々のパーツは人間と変わりない。明度の違いはあれど全員黒髪であり、どこことなくアジアンな顔立ちをしている。

なんかこえーな。

オヤジ狩りの一団じゃねーよな？  
ダンディハント

「さーで、獲物は……あれ、なんだべ？」

「人でねーが？」

「おいおい、やばぐねが？ 間違つて人ば畏さかけでまっだ」

「おーい、大丈夫だが？」

ふむ、話し合いを聞くにいい人達つばいな。

「大丈夫大丈夫。それより降ろしてくれない？」

「へば、ちよつとこさ待つでろ」

しばらくして地面へと降ろされた。

「すいませんでした」

四人が揃つておっさんに頭を下げる。

「まさか、こんな田舎いながの森に人が入つてくるなんて思つてながつたはんで」

「いやいや、おっさんも驚いたよ。巧妙な畏仕掛けるねー」

「だべ？ 自信作だ」

男達の一人が下げた頭を上げて誇らしげに語る。

「自信があるのもわかるな。全然わかんなかった」

まあ、考え事してて注意力が散漫だったただけだが。そうじゃなかったら、木の注意によつて避けていたことだろう。

「んでも、ホーソラビットとがを捕まえるにはこんぐれえの畏じゃねーとダメなんだ」

「あいづら、ちょっとした違和感を感じたら罨にはちがよんねーがんな」

「んだんだ」

ホーンラビットって、あのロップイヤーさんか？

忘れもしない、寝てるおっさんを角で突いてたあいづらの姿だけは！

……よく考えたらあんまり恨みに思っていないんだよね。どうでもいって言うか……

「ホーンラビットってうめーの？」

「ん？ まあ、そこそこだな」

「ハイキングベアーの方がうめえげっちょ、ありやつええがら」

ハイキングベアーとは多分二足歩行してた熊のことだろう。

おっさんはこいつを見かけたらすぐに逃げる。

「うん、そっか。大変だね。じゃあ、とりあえずお詫びの品をくれ」

「は？」

「え……」

場が哑然とした空気に包まれる。

そりゃそうだ。

元々の話、獲物を捕らえるために仕掛けた罨にかかったマヌケはおっさんの方ではある。罪悪感もあって謝罪した彼らではあったが、おっさんの友好的な態度に胸を撫で下ろしていたに違いない。だが甘い。

普段のおっさんなら笑って許して終わりだろうが、今のおっさんの状況は無一文。

こうゆう機会は活用せねば。

「えっと……」

「とりあえず金銭での詫びを入れてくれ」

「オラ達、ほとんど自給自足だから……金はあんま持つでねえ」

「よしわかった。あんた達全員その場でジャンプしろ」

おっさんの言葉に対して男達は素直にその場で跳びはねた。

おっさんは素直な奴は大好きです。つーか素直すぎる気もするけどね。

そして男達のジャンプに合わせて聞こえる金属音。

「お、持ってんじゃん。出しなさい」

「い、いや……これはナイフの音だあ」

「とりあえず出しなさい」

無駄に強気なおっさん。

だがしかし、内心逆上されたらどうしようかとドキドキものです。

ただどこいつらのオドオドした感じが、その心配は杞憂だと思われる。

オッサンとは反発する若者は苦手な奴が多いが、従順な若者には強気な生き物です。おっさんもその内の一人さ。

差し出されたのは刃渡り10cmちょいの外見果物ナイフみたいな物。つーか果物ナイフにしか見えない。

りんごでも採りにきたのか？

まあ、毒りんご的なのかないけどね。

狩りに出た人間の装備としては貧弱だ。ナイフの良し悪しが分からないおっさんでもこれはナマクラだと判断出来る。

「はい、返す」

「あ、どうも……」

「他の奴らも提出ー」

おっさんの声にまたも男達は素直にそれぞれ金属音の元を差し出し  
てくる。

ほんと、こんなに素直で良い奴ら初めてだ。

差し出されたのは全員似たり寄ったりの品で、おっさんの食指は全  
くといっていいほど動かない。

「はぁ……」

自然とため息がこぼれる。

ため息をひとつ吐くと幸せがひとつ逃げてくなんて俗説もあるが、  
この際仕方ないだろう。

「……なんが、すみません」

謝られた。

こいつらは全然悪くないのに。

やべ…… おっさんの罪悪感がチクチクと刺激される。

「こちらこそ調子に乗ってしまったようで……」

「いやいや、オラ達が悪いんです」

「なんだ。貧乏で何もあげられるもん持つでねえのがわりいだ」

「お前ら……」

いい人過ぎやしませんか？

「好きだぜ」

「……え」

「あ……」

「ぬう……」

「オラ、嫁っこがいるんだげっちょ……」

「そっという意味ではない。おっさんは女好きだよ？」

めちゃくちゃって頭に付くくらいな。

「それにしても優しいのはいいが、優し過ぎるぞお前ら」

「だって……なあ？」

「ああ」

「んだ」

「何？　なんで知り合い同士、目で会話してんの。おっさんも話の輪に入れてよ」

「だつて、あんた……鎧は着てっけども股間は葉っぱで隠<sup>かく</sup>してるぐらいだから、哀れで……」

……うん、まあ、そうだね。

おっさん、そんな格好してたね。

自然と受け入れてたよ。

とゆうーか胸とかは鎧じゃなくて一応、おっさんの肌なんだけだね。  
感触あるし……

つまり、全裸に葉っぱだけだった。

「……じゃあ、腰に羽織るもんない？」

「どんぞ」

差し出されたのは四枚のタオル。

おっさんはそれで簡易版の褌<sup>ふんどし</sup>を作成し、葉っぱの代わりに股間を隠すのだった。

……あ、激しい動きだと取れちゃうな。



## おっさん、人と出会う（後書き）

いつか来るかもしれない質問を先に回答しておきます

Q・なぜ言葉が通じるのか？

A・ファンタジーだからです

Q・主人公は戦わないのか？

A・そのうちあるかもしれませんが、少なくともそこそこの話です

Q・主人公の名前って？

A・一応、次話にて名乗る予定

私が現段階で思い付くのはこれくらいですかね。

他に何かあれば遠慮なくどうぞ。ただ、ネタバレになるような質問には回答できません。

## おっさん、名乗る

タオルのお礼と言ってはなんだが、スキル木々の声を活かして狩人達の狩りを手伝うことにした。

要はホーンラビットがよく通る道やホーンラビットの餌場などを教えてもらえばいいだけの話だ。樹木達はおっさんの味方なので基本的に何でも教えてくれる。

狩人達も良い狩場知ってるよと言ってやったら両手を挙げて大喜びした。

そんなに喜んでくれるのは嬉しいが、結果が出てからにして欲しいものだ。

あと、もう少しおっさんの素性を疑うとかないわけ？

客観的に見ると結構怪しい奴よ？

まあ、説明するのもめんどくさいから聞かれない方が都合いいんだけどね。

よし、気分がいいからサービスだ。食える山菜とかキノコも採ってやんよ。

結果として狩りは成功だった。

成果はホーンラビット六匹。いや、ラビットだから六羽の方が正しいのか？

とりあえず成功だ。

おっさんの指定したいくつかのポイントに狩人Cがおっさんの引っかけた罠を設置し、獲物がかかるまでひたすら待つ。そしてかつた獲物を狩人A、Dと協力して捕まえる。その後にもた罠を仕掛ける。

これを狩人達が繰り返している間におっさんは狩人Bを連れて食用

植物を取りに行った。

狩人Bもそこそこ食用植物には詳しかったが、木の声を直に聞けるおっさんほど森の植物に詳しい奴はいない。

一時間もすれば両手に抱えきれないほどの食料を得た。

それにしても動物を殺す瞬間って惨いよな。おっさんも真つ当な人間だった頃に田舎で飼ってた鶏を絞め殺して羽根<sup>はね</sup>揃ったことあるけど、途中で祖母<sup>ばあちゃん</sup>に変わってもらったもん。今じゃ、食料確保してる間に時々見かける事のある弱肉強食の世界によって見慣れた光景とは言え見ると気持ちが悪くなってくる。

「大丈夫だか？」

「……そんなに大丈夫じゃない」

「あんた、グロ耐性のスキル持ってないのが？」

グロ耐性のスキル。

そんなもんがあるなら是非とも欲しいもんだ。

「どうやつ……」

どうやったら獲得できる？ と聞こうとした口を閉ざす。

スキルを得る方法は経験か修業。

ならばグロいものを率先して見たり、運悪く見てしまった奴が得るスキルなのだろう。

ネット画像とか写真とかならまだいいけど、隣でグチャグチャやってんの見るのはいやだ。

「大丈夫だあゝ。解体作業は百匹も見れば取れっからゝ」

励ますな。

別にグロ耐性ないからって落ち込んでるわけじゃない。

「んでも、これだけ取れば力カアに怒られなくていいな」

「これもあんたさんのおがげだあ」

「あんたも村さ来い。わーの作った野菜ばやる」

「オラの作った野菜はうめど」

すっげえ笑顔でおっさんの方を見てる狩人達。

笑顔が眩しいぜ。

それにしても、野菜作ってる奴ってお礼とかに大抵自作の野菜あげるって言い出すよな。おっさんの実家の連中もそうだったし、農家の友達もそうだった。

まあ、嬉しいんだけどね。

「狩人A、B、C、D……じゃあ、誰か泊めて？」

沈黙が降臨した。

なんか悪いこと言ったかな？

あれか？「泊めて」はまずいか？

芸能人が田舎に泊まるテレビ番組でも難儀することがあるからなー。でもテレビが入るわけじゃないからハードル低くね？

いや、よく考えると今日会った奴を泊めること自体がレベル高すぎか。

例え彼らの家が掘って建て小屋であっても褒める自信があるのに残念だ。

「なあ」

沈黙を破るようにAが口を開く。

「狩人エー、ビー、シー、デーっておら達のことだが？」  
「うん、そうだけど？」

なるほど、まずは他愛ない話をしつつお泊りを拒否るわけだな。  
はつきり言ってくれていいのに……

「そついえば、お互い名乗りあつてながたな」

「まんず名乗りあうのが礼儀でねえが」  
「んだ」

というわけでお互いに自己紹介する運びとなった。

とりあえず簡潔にまとめていこう。

「だば、おらがらいくが」

狩人A。本来の名前はスノー。

スノーとか言いつつ、肌は日に焼けて茶色だ。

彼は四人の中で一番でかい。

また、Aを冠するだけあつて彼らの中のリーダー的存在だ。既婚者。

なお、嫁の尻に敷かれているらしい。また、嫁が妊娠中。

「次はわの番だな」

狩人B。本来の名前はトイース。

一緒に森で収集した男だ。

顔立ちはまだ二十代だというのに可哀相な頭をしている。でも既婚者。

「だらわーがいくど」

狩人C。本来の名前はスサウ。  
罨の名人。

身長は小学生くらいしかないけれども、あごひげの影響でかなり年  
がいてるように見える。やはり既婚者。

「最後はオラだな」

狩人D。本来の名前はウエスト。

他の三人に比べると細い。だが、筋肉質だ。

また、彼らの中では頭がいいらしい。はあ……既婚者。

全員既婚者だよバカヤロー！

なんだよ。三十過ぎても結婚出来なかったおっさんへの当てつけか？  
くやしくないよ？ だって、三十過ぎても結婚してない野郎なんて  
いっぱいいるしー。

「んで、あんたは？」

今度はおっさんの番のようだな。

「おっさんの名前はたか……」

ちよつと待て。本名を名乗っていいものか……

こいつらの名前を聞く限り日本的な名前だと浮いちゃわね？

とゆーかすでに以前のおっさんは死んじゃってるわけだから新しい  
名前が必要ではなかるうか。

とは言っても西洋風な名前なんて咄嗟に思いつかん。本名を換<sup>もじ</sup>るか？

……ないな。

うーん……一旦持ち帰って考えたい。

だけど、考えれば考えるほど坩堝に嵌まる気がする。

だったら……こうしよう。

「おっさんには名前がない。この森で生まれ、この森で育ったが故に。だからどうだろう、君達がおっさんに名前を付けてくれないか？」

「おら達が？」

聞き返すスノーに頷いて返す。

自分で名前を考えるのが面倒ならば、他人に考えてもらおう作戦だ。

「でも、なんでわー達が？」

「んだ。自分で付ければいーべ」

まあ、こうくるわな。

理由がめんどくさかったからじゃダメだよな。

どうやって言い訳しよう……

「それはだな……」

考える。考えるんだ。

自分を叱咤激励する。

すると、天啓のようにパツと頭に最適な言い訳が浮かんだ。

「名前つてのはさ、自分で付けるものなのか？ 君達だって親に付けられただろう？ つまり、血の繋がりがあるとはいえ他者に名付けられたはずだ」

おっさんの言葉に四人が理解の表情を浮かべる。

「だからこそ、信用出来る君達におっさんの名前を付けてもらいたいんだ」

ここで信用してることもアピールしておいて、お泊まりの許可をもらいやすくする算段を練る。

ふふふ、おっさんたらなんてクレバーなんだ。

「よ、よし。おら達がいい名前付けでやつから！」

「任せどげ<sup>まが</sup>」

「どんなんがいいべ？」

「テソロとかどんだ？」

「それは今度生まれるおらの子供の名前だべ！」

四人で固まって話し合ってくれている。

はてさて、一体どんな名前を付けられるのかな？

よほど変じゃなければ、どんな名前であっても受け入れるつもりだ。その名前でこれから生きていこうと思う。

近くにある木に寄り掛かって座り、結果を待つことにする。

『あんっ』

「おっと、すまん」

どうやら寄り掛かった時に木の性感帯に触れてしまったようだ。

『いいんですよ。それより名前付けられるみたいですね』

「え？ あ、うん」

『その旨を報告しましたら、ラウルス様がわしが名付けると言っていましたよ』

「へー」

ちなみにラウルスとは大樹の名前である。  
ただとおっさんの中では大樹は大樹。名前などない。

「参考までに何て言ってるの？」

『えーと、ですねえ……ムシビト1かムシビトαで迷ってるそうです』

「却下つつといて」

『はい』

大樹に名前付けてもらうことを考えつかなくて良かった。

そういえば、修業中にこの森のほとんどの木の名付け親は大樹だと聞いたことがあったな。あの杉15065みたいな感じのセンスのカケラもない奴。

絶対名付けられたくないね。

自分の案が即座に却下されたことで大樹が激しく落ち込んだ事はここで語るような事ではあるまい。

そうこうしている内に話し合いの終わった狩人達がおっさんの元に近寄ってきた。

「いい名前付けてくれたのかな？」

「最終的に三つ候補がでぎだ」

「ふーん、そっから選ぶわけね」

おっさんにも選択肢を与えることで、華を持たせてくれてるのかな？

「どんなのがあんの？」

「エメ、ラルド、グリーンの三つだ」

そっかその三つの中ならどれかな〜……って!?

「なにそれっ!?! 全部見た目からじゃん! なんでそんな安直になっただ？」

エメ、ラルド、グリーン。繋げて読めばエメラルドグリーン。まだまだ。

「いや〜、パツと思いつぐのがなくてえ」

「スサウがプリンプリンとかふざげっからあ〜」

「おめだつて、悪ノリして名前ばアナルにしようとか言つてたっぺ」

なんでこいつらこんなに学生のノリなの？

判断間違っちゃったかな〜。

とりあえず真面目に考えてみる。

プリンプリンとアナルはないな。

でも、アナルって響きはちょっと惹かれるものがあるから将来息子が出来たら案として使わせてもらおう。

んで、エメラルドグリーンに関してだが、安直ではあるがわかりやすい。

面倒だし、この中から選ばう。

まず、エメ。

エメさんと呼ぶ姿を想像してみる。

なんかひょうきん者のイメージだな。ダンディーなおっさんには合わない。よって却下。

次に、ラルド。

これ単体で見れば、そこそこな代物だ。響きがいい。おっさんの名

前の第一候補にしよう。

最後に、グリーン。

歌を唄うイメージがある。響きは悪くない。だけどどこことなく主人公のライバル的ポジションっぽい感じがするのはなぜだろう？

「ラルドだな」

吟味した結果、やはりこれが一番しっくりくる。

「おっさんの名前は今日からラルドだ」

「そうが」

「よろしく、ラルドさん」

「いい名前だあ」

「名付けだオラ達も納得だべ」

【虫人は固有名ラルドを得た】

天の声が聞こえた。

おっさんの名前はラルドで本決まりしてしまったようだ。だが、これでいい。

おっさんはこの世界で生きていくのだから。

こうして名前を得たおっさんは狩人達に付いて行って、彼らの村へと訪れるのだった。

ちなみに泊めてくれと頼んだ時に沈黙が降りたのは、おっさんが自分達を記号の如く認識しているのに気付いてちよつと傷付いたためらしい。

泊める事自体は奥さんに聞いてみないとわからないとのことだった。

なお、おっさんはラルドという名前が豚の脂ラーのことだとは知る由も  
なかった……

## おっさん、名乗る（後書き）

固有名詞はだいたい適当につけてます。

主人公の名前も本当にエメラルドグリーンから取ったんですが、まさか適当に取った名前がこんな意味を持つとは……

まあ、ありかなしで言えばあります。むしろ彼には合ってる気がします。

## おっさん、旅立つ

「ラルドさん、このキノゴって食べっぺか？」

拝啓、大樹様。

「おっさんは食べる。だけど、トイース達はダメだ。食ったら体が痺れて動けなくなるぞ？」

お元気ですか？

まあ、根っこワークでお互いの近況はよく知ってるでしょうが、改めて報告しようと思います。

「危ねーどこだったなー」

おっさんは今、三ヶ月ほど前に出会った狩人達の村で彼らと同じく狩人として生活しています。

「この実は食べるべか？」

最初は苦難の連続でした。

だって村人の視線、特に女性の目がドライアイスみたいに冷たかったからです。

「うん、食えるよ。スノーの嫁さんみたいに産後の人なら丁度いいんじゃないか？」

それもこれも、村に着いた時におっさんが腰に装着していた簡易型

の褌ふんどしが外れていたのにも関わらず、それに気付かないで村の中を闊歩したのが悪いんだと思います。

露出狂の誤解を解くのに大変苦労いたしました。

今ではちゃんとした褌を着用しています。あくまでも褌のみで、他はなんも着てません。なぜなら装甲的な身体のせいでおっさんに合う服がないからです。

まあ、慣れましたけどね。

「おお、キャロルにいいつつーんならいつぱい探って帰んべ」

女性の反応はすこぶる悪かったとしか言いようがありません。

あっちに行つては逃げるように視界から消え去り、そっちに行つては露骨に嫌な顔をされました。

ただどなぜでしょうか。

……ゾクゾクしました（悦）

「キャロルって、いいケツしてんだよな」

あの冷たい視線がたまりません。

しかし、彼女らは皆旦那付きです。つまりは人妻。

基本的に旦那が知らない野郎なら大興奮してしまうのですが、先に旦那達と仲良くなつてしまうと、人妻と言うよりも〇〇の嫁と思つてしまい、正直萎えます。ゾクゾク感は半減です。

おっさんは友人の嫁に手を出すほどひとでなしではありませんからね（笑）

「ラルドさん。いや、ラルド……嫁に手え出したらぶつ殺すかな！」

あ、友人も増えました。

男なんて一緒に酒飲んで夢でも語り合えば、そこそこ仲良くなれます。

あとの夢なんかねえよって奴らは、下ネタで落としました。どこいっても男のエロさは変わらないなとしみじみ思いました。

「いや、キャロルはケツはいいんだが、胸が更地過ぎて欲情しないんだよね。だからスノーはきっとロククライミングが趣味なんだなと常々思ってる」

話は変わりますが、つい先日、村の畑におっさんが植えた作物の収穫がこの間ありました。

早過ぎると思うかもしれませんが、実はおっさんには植物の成長を促進する秘められた能力があつたのです。

「それは抱いてるおらに失礼しつれいでねえが。キャロルは確たすかに胸はねえけれども、美人だ」

きっかけはおっさんが種蒔きに参加した後のこと。

成長具合が気になって仕方がなかったので、早く芽を出せと祈ったことからじまります。

その後、あれよあれよという間に作物が成長していったんです。

これによって、おっさんはどうやら植物成長促進というスキルを持っていたことが判明しました。そういえばエメラルドスタッグビートルになった時にそんな感じの天の声が聞こえたかもしれません。

「うん、美人（笑）だよな。ま、おっさんはもつとボン・キュツ・ボンなおねーちゃんがいいけど」

植物成長促進のスキルが判明してから女性達の態度がすごく軟化しました。

でも、どこことなく残念な気持ちなのはなぜでしょう……

「だったらオラの嫁ば狙ってんのが？」

村長さんにも村人として永住しないかと言われました。

おっさんの心の距離を縮めようと必死なのが端で見ててもよくわかります。

「ウエストの嫁ははつきり言って顔の造形が好みじゃないなー」

どうするかはまだ決めてません。

だけど、わりと前向きに検討しようかと思っています。

「ラルドさんは女の好みにうるさ過ぎるんでねえべが？」

この村はおっさんに仕事をくれました。

そしておっさんが生活するのに必要な物を無償で提供してくれました。

「好みってゆーか、二十五歳以上でナイスバディな美人がいいってだけ。これだけ満たせばどうでもいい。おっ、美味そうなキノコみっけ」

仕事ではいなくてはならない存在として重宝されています。  
無駄に自信が付きました。

落ち込むこともあるけれど、おっさん、この村が好きです。

「明日にでも村出ることにした」

「……え？」

突然のおっさんの発言に驚いた表情でその場にいた全員がおっさんの顔を見る。

今度は何を言い出したんだコイツ？　みたいな表情がありありと浮かんでいる。

ここは村で唯一の酒場。

内装は西部劇にでも出てきそうな造りで、扉は例のパコパコするタイプのやつだ（ウエスタン扉）

二階に宿泊も出来るので、おっさんは現在そこに住まわせてもらっている。

今日は狩りの成果もそこそこ良かったので東西南北の四人と祝杯を挙げてるというわけだ。

ちなみに東西南北とはトイス、ウエスト、スサウ、スノーをいくりにした呼び名だ。

その現場にておっさんは自身の今後の予定を告げた。

はつきりいえば急な話だ。おっさんは事前になんのそぶりも見せたことはなかった。とゆうかさつき決めたんだから当たり前だ。

突然の引退は周りに迷惑をかけることも理解している。

ただとおっさんは元々外様だし、問題はないと思う。

手紙口調でこの村が好きだと言ったが、ずっといるとは一言も言っていない。

あくまでも前向きに検討すると言った政治家答弁だ。むしろこういう発言が実現されることはあまりないのではないだろうか？

「つか最近、大樹が「まだタフアの森には行かんのか？」って根っこワークを通じて村にある木に言付けてくる。

どうやら永住しそうな勢いで村に馴染むおっさんを杞憂してるらしい。

そこまで自慢したいのかよ。

「随分と急でねえが？」

「んだ」

「用事があるんだよ」

「だけれども……」

引き止めようと言葉を紡ぐ東西南北の面々。

お前ら、そこまでおっさんが好きか。

人気者だなー。

ただどな、おっさんが村を出る決意をしたのはお前らのせいでもあるんだぞ？

ぶっちゃけ羨ましいんだよ。

嫁と仲良くキャツキャウフフしやがって……

目に毒、心に罅ひびなんだよ。

この村は二十歳越えた奴は男女を問わず、ほとんど結婚済みだ。なんかしらないけど心に焦りが生まれる。結婚願望はそれなりだったんだけどなー。

まあ、でも……

「いつかこの村には帰ってくるよ。今度は嫁を連れてな」

農家とか狩人とかはおっさんの的には天職っぽいしな。  
それにやはり東西南北との固い友情はあるわけだし。

「……だったらー、せめでもう少し出発は延ばせねえべか？」

「んだ、明日つてのは急過ぎるっぺ」

いや、確かに急だけどさー……

「事前に言ったら村長が全力で引き止めにきそうなんだよなー。それに……」

「それに？」

一拍置いて四人の顔を見回す。

おっさんが何を言うのかを期待して、生唾ゴクリって感じた。  
やれやれ……なら、その期待に応えてやろうかな。

「親しい奴にだけ告げてフラリと消えるってのかつこよくね？」

さすらいのダンディさ加減に痺れるぜ。

「ねえわ」

東西南北が口を揃えて言った。

まったく、ダンディってのが分かってねーなー。

翌日、宣言通りにおっさんはまだ日も昇っていない早朝に村を出た。  
村人の朝は異常に早いものだから仕方ない。

起きられなかったらまずいのでおっさんは徹夜だ。  
ずっと酒を飲んでいた影響でフラフラである。

見送りは四人の男達のみ。

こいつらもおっさんに付き合っただけで夜通し飲んでたので具合が悪そう  
だ。

なんかもう、出発は明日でもいいんじゃないかと思わなくもないが、  
そしたら明日は明日でこんな状態になってそうなので無理を推して  
今日出発する。

「ここで見送りはいいぞ」

「だらもう家さ帰るじゃー」

「んだらまだなー」

「まだ来いよ」

「んだらまんつ」

名残惜しさは微塵もない。

わりとあっさりと東西南北は背を向けて歩き出す。  
さ、寂しいなんて少ししか思っていないぞ？

去っていく東西南北の背を見つめていると、不意にスノーが振り返  
る。

「ラルドさーん！ 嫁ば見つけたらまた帰ってこいよー！」

そしてスノーと同じように三人も振り返りおっさんへと声をかけて  
くる。

「帰ってくるまでにラルドさんの家ば造っておぐがらなー」

「いい女つがまえろよー」

「とりあえず素を出すのは控えどけー」

口々に投げかけられるエール。

そう、彼らと交わした言葉にさよならはない。

いつか再び会えると確信し、『また』と全員が言った。

おっさんは四人の気持ちに応えるように声を張り上げる。

「また……ウツ……」

やばい……声を張り上げたせいで胃から込み上げてくるものが……

ここで込み上げてくるのが涙でなくてどうする！

ゲロはダメだ。

折角の微感動場面が台なしだ。

せめて……あいつらが各々帰るまで耐えるんだ……

くそっ、いつまで手を振ってやがる。さっさと帰れ……

くそっ……もう……ダムが……決壊する……

――しばらくお待ち下さい――

はぁー、スッキリした。

んじゃいこつと。

背後は振り返らない。

むしろ振り返ることができない。

おっさんの吐瀉物はそのままだ。

きつと大地へと還り、綺麗な花を咲かせることだろう。

こうしておっさんはやっと旅に出た。

東西南北の四人は折角の旅立ちのシーンを台なしにした一人の男の背中が見えなくなるまで見送っていた。

「吐いだな」

「うん、吐いだ」

「盛大にな」

「台なしだべ」

「んでも、ラルドさんらしいな」

「あ、それわかるべ」

「あん人はあれでいいんだ」

「ちゅーか、わーもなんが吐きそうなんだけど……」

「もらいゲロかよ」

「あ、ダメだ……ウオエツ！」

「あーあーあー……」

「まったく……」

四人は笑い合いながら家路へと向かう。

四人が一晩中飲んでしたことによって無断外泊の形になってしまったがために、嫁が家でどういう心境で待っているかなど考えもしないで……

ちなみに最も被害が大きかったのはスノーであった。



## おっさん、旅立つ（後書き）

オッサンの村での生活をダイジェストでお送りしました。  
植物成長促進のスキルは作者自身も忘れかけてましたね。

## おっさん、捕まる

それは今にも雨の降り出しそうな雲に覆われた日のことだった。  
すでに村から旅立って四日というところだ。

たった四日と侮ることなかれ

おっさんは昆虫形態のスキルを使ってクワガタの姿になることが出来る。  
インセクトフォーゼ

つまりは飛べるのだ。

そんなおっさんの移動距離は一般ピーポーとは比べものにならないほどだからね。

まあ、初日は途中でへばってあんまり進めなかったけど……

だけどそれを帳消しにして有り余るオッサンの勇姿。割れながら惚れ惚れする。

しかしなんだな。

おっさんは性格のせいなのか分からないけど、わりと友達はいるタイプなのよ。

まあ、逆に嫌われる場合はとことん嫌われやすくもあるんだけどね。  
まあ、それは置いておいて、つまり何が言いたいかというところ……おっさんは寂しいんですっ！

そりゃ、移動をやめればそこらにある木に話しかけて相手してもらうんだけどさー。移動中はそんなこと出来ないわけで……

東西南北の奴らと交流持ったことで人と触れ合うことを思い出して寂しさ倍増しちゃってんだよ。

一人旅も嫌いじゃないけど、ワイワイ楽しい旅の方が好きだ。

旅は道連れって言うんだし、東西南北の連中も連れてくりゃよかった。

どっかに旅してる集団とかいないかな？

いたら混ぜてもらうのにな。

まあ、おっさん以外全員が知り合いって状況は疎外感が半端ないけど、話を下ネタに持っていけばおっさんのターンに持ち込める。

「なあ、周辺に誰かいらないかな？」

ということとで近くにいる木に周辺の情報を聞いてみる。

木の一本も生えてない荒地などなら別だが、一般的な大地の状況について彼らが知らないことは少ない。

彼らは無駄に他人の秘密を知っている。また、それを木にしか言えなかった反動なのかやたら口が軽い。トイースが外で嫁と子作りに励んだ場所とかはあんまり聞きたくなかったぜ……

『任せんしゃい。十秒あれば根っこワークで周辺の奴らから情報がくるけん』

何より、何度も言ってる気がするが、こいつらはおっさんに協力的なのだ。

おっさんのことは根っこワークを使って情報がいつてるらしく、いきなり話しかけても嫌がったり疑問を感じることはなく、むしろ喜々として話し合いに応じてくれる。

程なくして、周辺にいる者達の情報を受け取ったおっさんはそういったところへ向かった。

その集団の姿はそう動かないうちに見えた。

とは言ってもまだ距離はそこそ離れている。

しかし、おっさんの目には新聞の活字よりはつきりとその様子が見て取れた。

これはおっさんが進化することで手に入れた千里眼のスキルの恩恵だ。

千里とは大体四千キロくらいだった気がするが、さすがにそこまでは見えない。しかし、十キロぐらいならば余裕で見ることが出来る。本気を出せばもっといけるに違いないが、まだ試してはいない。とゆうーか青看板みたいな「〇〇まで〇キロ」みたいな指標がないからしょうがないよね。

さて、話は変わって集団の様子を述べよう。

集団とは言っても見える範囲には五人しかない。テントを張ってるからその中に誰がいるかもしれないので、五人以上ということだ。それでこの集団、物々しいことこの上ない。

体には重そうな鎧、腰や手には剣やら槍やらを携えている。

顔はやの付く職業のお方みたいな強面で、傷やら入れ墨みみたいなのが付いている。

ぶっちゃけ怖い。

なんつー物々しい集団なんだ。

こんな奴らに財布出せって言われたらおっさん即効で逃げるぞ。

え？ 差し出さないのかつて？

嫌だよ、もったいない。

あいつら人からカツアゲした金で絶対キャバクラとか風俗行くんだよ？

おっさんだって滅多にいけないつーのにそのおっさんの金で行くとか許せますか？ いや、許せません。

それで捕まって殴られて脅されるならそれがおっさんの運命。逃げられたらラッキー。

むしろ財布に入ってる免許証やら保険証見られる方が怖いよ……

まあ、なんだかんだ言っただけでそういう方々とまともに出会ったことがないから好き勝手言えるんだだけだね。

うーん……それにしても声をかけるべきかかけざるべきか悩むな……普段なら悩まずにスルーするんだが、寂しさ募るばっちなおっさん的には会話出来るならこの際ヤーさんでもいいとか思っただけで……ん？ スルーする？ ぶほっ！ スルーするとか秀逸なダジャレが偶然出来てしまった。言いたい。これは誰かに伝えたい。

よし、彼らに言ってみよう。

なーに、おっさん渾身のダジャレに全員大爆笑するだろうから全てはノープロブレムだ！

などと、浅はかにも思っていた時期がおっさんにもありました。現在おっさんは縄で縛られて轡を噛まされて地面に横たえられています。

なぜ、こんな状態になったのか。

理由は簡単に推測出来るかもしれないが、あえて言おう。

おっさんは盛大に滑ったのだ！

あれだよな。

発見されて開口一番に「貴様何者だっ！」とか「怪しい奴めっ！」とか威圧的に言われてんのに「あんた達が見えたから仲間に入れて

貰おうと思ったんだ。ホントはスルーするとこなんだろうけどね？  
スルーする、スルーする……笑えない？」とか言ったのがダメだったのだろう。

もう、ダジャレを放った瞬間に「あ、これダメだ」と思いましたよ。それなのにダジャレだつてことに気付いてない可能性を考えてスルーするってとこの説明までしちゃった。

寒さは倍率ドン更に倍。

清々しいまでに事態は悪い方向に転がり、怪しい奴つてことで取っ捕まった。

縛ったのがむさ苦しい男なら轡を噛ませたのもむさ苦しい男。

テンション下がるわー。

せめて女はいないものか。

「報告にあつたのはその男かしら？」

おっさんの想いが天に届いたのか、鈴のような響きを持つ声がおっさんの耳に届く。

視線を動かしたおっさんの目に飛び込んできたのは、深紅のロープを身に纏う高校生くらいの女の子の姿だった。

周りにいる男達よりも頭一つ分は背が低いが周りの男達はおっさんよりもでかいので、女性としては高身長であるう背丈。これだけ見ればおっさんのストライクゾーンにいるのだが、腰元辺りまで伸びたロープに負けないくらいに鮮烈な赤色をした髪をツインテールにしており、それが彼女の容姿を幼く演出している。ま、胸の発育具合が残念なのも一つの要素か。勝ち気そうに釣り上がった瞳やこちらを見て微笑む仕草などはおっさんの好みなのだが残念なことに……

おっさんの好みではない！

要はストレートだったらストライクだったのに、大きく縦に割れるカーブを放ったせいでベース手前でワンバウンドしてキャッチャーに届きました的な感じ。

美少女ではある。それは認めよう。

だが、おっさんは美少女には興味が無い。美少女から美女にクラスアップしてからお会いしたかった。あ、胸ももう少し成長して欲しいな。

「アイリス様、この者いかがいたしましたでしょうか？」

「殺しなさい」

はい？

え、何て言ったのこの娘？

殺しなさいとかいきなり過ぎやしないか？

もしかしておっさんの心の声が聞こえちゃったのかな？

「かしこまりました。おい」

重厚な鎧に身を包んだ巨漢の声に、おっさんの近くにいた細身の男が腰から剣を抜き放つ。

その剣は鈍い光を放ちながら上段へと振り上げられた。

「んーんー！」

必死に止めてくれるように声を張り上げるが、如何せん轡によってその声が他者に理解されることはない。

「あら、何か言ってるようね？」

「今生への別れか怨嗟の言の葉かと」

「それは是非とも聞いてみたいわね」

「かしこまりました。轡を外せ」

巨漢の男の言葉に剣を振り上げたままの細身の男とは別の顔に入れ墨のある気合い入ったにーちゃんがおっさんの轡を外す。

「さあ、あなたの死に際の呪いの言葉を聞かせてちょうだい」

少女がやたら期待の籠った瞳でおっさんを見つめる。

どうやら少女は特殊なご趣味をお持ちのようだ。

これが俗に言う変態なのかもしれない。

「とりあえずおっさんを殺すのは待とうか？」

「嫌よ」

「なして？」

「だってわたくし人が死ぬ直前の絶望や怨嗟の声が好きなんですもの。殺さなければ聞けないでしょう？」

それが本音からくるものなら、この娘はかなり危ないよな？

おっさんってば知らず知らずのうちに虎穴に入ってたわけか……才ーマイガット！

「……殺さないで下さい」

「ダメー！」

おっさんの切実な願いは可愛らしく断られた。

どうする？

どうすんの？

どうすりゃいいのっ！

おっさんめっちゃピンチじゃん！？

絶体絶命とかそんな雰囲気じゃん。

口八丁で丸め込むとかそんなこと出来るレベルじゃない気がする。あっちはおっさんを殺す気満々過ぎてどうしようもない。

よし、ここは法を盾にしよう。

「人殺しは犯罪ですよ？」

「あら、ここがどこかの町の往来で、わたくし達の他に誰か目撃者でもいれば別ですけどここは町ではありませんし、周囲にわたくし達以外の誰かおりますかしら？」

いませーん。

木に確認してもらったけどあんたらしか人はいませんでしたー。くそっ、なら一か八かで良心に訴えてみよう。

「おっさんには妊娠中の妻と三人の子供が腹を空かしておっさんの帰りを待つてるんだ」

「子供がお腹を空かせるなんてあなたの罪だわ。無計画で作るからダメなのよ。どうせ養いきれなくて口減らしに捨てると言う更なる罪を犯す前にわたくしが断罪して差し上げるわ」

なんか怒られた。

彼女は自分が言ってることが目茶苦茶だと気付いてるだろうか？

「……もういいわ。やっぱり死ぬ間際でないといい声では鳴いてくれないみたい。殺しなさい」

下される死刑執行の言葉。

振り上げられた剣がおっさんの首へと降ろされるのがスローモーションのように緩やかに見える。

終わった。

よくよく考えればすでにおっさんの生は大分前に終了している。  
今は何の因果か意識はそのままに新たな生を与えられたに過ぎない。  
その与えられた生を返還する時が来ただけのこと。

これでおっさんに主人公補正というものが存在するならば、空から  
雷が落ちて剣を振り下ろす男に落ちるのだろうが、そんなことがお  
っさんに起こるわけがない。

あ、でもとりあえず「大樹、東西南北……わりい、おっさん死んだ」  
とか言って笑った方がいいんかな？

しかし、今更間に合わないよね？　どんだけ早口で言わなきゃなら  
んのよって話だし。

ならば足掻くだけ無駄なのかもしれない。

ちよつと理不尽が過ぎすぎて納得出来ない部分もあるが、無理矢理  
でいいから納得しとこう。

理不尽が過ぎすぎ……ぶほっ。

キンツと甲高い音。

それはおっさんの首へと当たった剣から発せられた。

しかしその剣はすでに元の姿とは掛け離れ、刀身を半ばから失って  
いた。

辺りに静寂が満ちる。

誰もが起こった事象に啞然として言葉を紡ぐことが出来ない。

そんな中、おっさんの耳には聞き覚えのある声が聞こえてきた。

【ラルドは武具破壊のスキルを得た】

## おっさん、捕まる（後書き）

主人公がポジティブ過ぎる……

作者がネガティブな反動かもしれないっすね

一里は約3・927キロメートル。ということで千里は約四千キロメートルです。間違いないですよ？

本来の千里眼は遠隔地の出来事や将来の事柄、隠された物事などを見通すことのできる能力とのことですが、主人公の千里眼は今のところ遠くがよく見えるだけです。

おっさん、逃げる

「た、助かった……のか？」

思わず口から声が発せられる。

それはこの場の静寂を切り裂いてその場の全員に正気を取り戻すには十分過ぎた。

「お、おれの剣が……」

細身の男はすぐ悲しそうな顔でその場に両膝をついた。

まあ、自分の剣が折れたのだ。大切にしてればただけその衝撃も大きいだろう。

それにしてもなぜ剣が折れたのか？

いや、そもそもなぜおっさんは死んでない？

「あなた……一体何をしましたの？」

少女がその鈴のような声を欺瞞色に染めて聞いてくるが、おっさんの方が聞きたいくらいだよ。

何をしたかの問いは簡単だ。答えは何もしていない。

とゆーか縛られてるんだから何も出来ないと言うのが正しい。

んじゃ、どうしておっさんは死んでないのか。

普通、剣で斬られれば人は死ぬ。

ん？ 剣で……斬る？

あ、斬撃無効だっ！

大樹にもらった斬撃無効のスキルがおっさんの命を繋いだのだ。

いやー、もらったはいいいけど使う場面ないし、実感したこともないからすっかり忘れてた。

「わたくしの問いに答えなさい」

おっさんが思考に耽っていることで返答しないことにイライラしているのか、苛立ちの感じられる声音で少女がせっついてくる。

「おっさんが何したかは自分で考えてね」

ここでむやみやたらに正直に言うこともあるまい。  
斬撃が効かないんだったら槍で突き刺しなさいってなる可能性が高いわけだし。

「くっ、なるほどね。剣が当たる間際に笑ったのは自分が死なないと確信していたのね」

はて？ 剣が当たる間際におっさんってば笑ったわけ？ そりゃ、笑った方がいいのかな位の思考はあったけど実際には……あ、そういえばくだらないことにウケてたかも。

とっさに浮かんだダジャレほど後々思い返して見るとくそ寒いことが多いんだよな。

そもその話、理不尽が過ぎすぎてなんてダジャレでもなんでもなく、ただ『すぎ』って言葉を一つ多く使っただけだ。

「アイリス様、わたしがザラに代わりこの者を処刑しましょう」

あ、まだ諦めてなかった。  
当然か。

次に進み出たのは上半身マッチョな男だった。

ただ……顔がチワワだ。

え、嘘？

何これ可愛い。顔ちっちゃい。

「いいわ。クピン、やりなさい」

「御意」

名前も可愛い。

マッチョなのが残念かと思いきや、それがギャップになって更に可愛い。

って、和んでる場合じゃねーっ！

ヤベーよ。早く逃げねーと殺される。

でもどうやって？

「ふんっ！」

とりあえずおっさんを束縛する縄に力を込めてみる。

【剛力のスキルが発動した】

天の声が聞こえる。意識発動型のスキルは発動と同時に天の声のお知らせがある。おっさんが現状持つてる意識発動型のスキルは千里眼、魔力波、昆虫形態、そして剛力の四つだ。

スキルを発動させるとブチブチッという音になってあっさりと拘束が解けてしまう。

そういえば、抵抗らしい抵抗したことなかったけどこっちはあっさりといくものなのか。

最初からやっつけば良かった……いや、使っていないから忘れてただけなんだけどね。

「逃げちゃダメ。＜赤熱の鎖よ 拘束せよ＞」

おっさんの拘束が解けたのを見た少女が腕を振るって言葉を紡ぐ。するとどこからともなく現れた赤い鎖がおっさんを拘束する。

「あつつ!」

ジューという肉が焼ける音が耳に届く。

この鎖、熱いなんてもんじゃない。

「ウフフツ、その苦悶の顔堪らないわ」

少女はおっさんの顔をみてその表情を喜悦に歪ませる。

「さあ殺しなさい」

「覚悟は良いか？」

「熱いとゆーか痛くなってきた」

チワワが背中に背負っていた大きな剣を構える。

何キ口あるのかわからないほどに重量感タツプリの無骨なデザイン。数多の獲物を斬ってきたのか、その刃はところどころ刃零れしている。

しかしそんなことに今のおっさんが注目出来るはずはない。

熱くて痛くて悶えることしか出来ないのだ。ぶっちゃけ、チワワが何もせずともこれだけでいずれ死ぬ。

くそー、これが蠟燭から垂れた溶けた蠟ならばご褒美なのに……

イメージだ、イメージしろ。このあつつい鎖は女王様の賜ったものでしかないんだ、と。あ、大分マシになってきた。

「さらば」

大剣が振り下ろされる。

「へぶっ」

その一撃は斬撃無効のスキルによりおっさんを切り裂くことは出来なかった。だが、その重量とチワワの腕力でおっさんの体が地面にめり込んだ。

痛い。確かにこれも痛いのだが……

「鎖の方が痛い……」

素直な感想がこれだ。

もう、マジで拷問だよこれ。まあ、イメージの影響でちょっと興奮するけど。

「まだ生きているだど？」

チワワが驚愕している。

驚いた顔がまた可愛いなオイ。

そういえばさっきまた新しいスキルを手に入れたんだよな。

武具破壊ってことで多少の当たりは付けられるけど具体的な条件とかはわからん。しかし、幸いにも大剣はまだおっさんに接触してるわけだし試してみる価値はある。

「壊れる」

【武具破壊のスキルが発動した】

天の声とともにチワワの剣に輝が入り、そのまま砕け散った。

「なっ！」

少女、周りの男達から声が挙がる。

おっさんとしては鎖も壊れて欲しかったが残念ながらそうはうまくことが運ばなかったのは悔しい。

「……なるほど。武器破壊のスキルですか……他者の武器を幾千幾万も破壊したものが至ると言われている境地。有象無象かと思いましたが、存外あなたは武人でしたのね」

「違います」

勘違いもはなはだしいことこの上ない。

おっさんが壊した武器なんて細身の男のものが初めてだ。

だったら何故おっさんがスキルを得たのかという疑問に突き当たるが、得たものは得たのだから仕方がない。細かいことは考えないようにしよう。

「謙遜は煩わしいからいいですね。あなたに武器破壊のスキルがあると知れば恐れるに値しませんわ。ドラゴンを殺す前に武器を壊されては敵いませんから、わたくしの魔法で殺して差し上げますわ」

「ドラゴン、だと？」

いるのか？

いや、ここがファンタジーな世界だというのならいても不思議ではない。

「あら、知らなかったんですの？ いいえ、違いますわね。あなたも狙っていらばつくれてるのですわね？」

「どういう、ことだ？」

「演技がお上手ですわね。まあ、あなたの狙いがドラゴン討伐による勇名か魔法具の媒介としての最高級品であるドラゴンの素材なのかはわかりませんが、それでも目的が同じならばあなたはわたくしの敵はが非でも殺しますわ。ライバルは少ないほうがいいですものね」

「いやいやいや、おっさんドラゴンに興味ねーから」

「さあ、遺言は済みまして？」

聞いちゃいねえよ……

くそつ、やべーな。逃げなきゃいかんが、剛力のスキルを使用しても鎖が引きちぎれない。それならば昆虫形態を……

インセクトフォーゼ  
「昆虫形態！」

【失敗。対象に接触する不純物あり。昆虫形態時分のスペースを確保しろ】

えー……うそーん……

そんな条件があつたんだ。

「何をわけの分らないことを……死になさい。く古の炎よ 全てを滅ぼせ」

少女の言葉とともにその背後に炎が現れる。

それは雪のように白く、圧倒的な熱量を誇る炎の塊。しかし、間近にいる少女は汗ひとつ掻いていない。周囲にいた男達は最も傍にいた巨漢の男以外は熱いのか少女から距離をおいている。おっさんにとって幸いなのは白い炎が現れたその瞬間に体を拘束していた鎖が消えたことだ。これなら逃げられる！

「昆虫形態」  
インセクトフォーゼ

【昆虫形態のスキルが発動した】  
インセクトフォーゼ

おっさんの姿がエメラルドグリーンのクワガタへと変わる。  
しかし己へと迫る白き炎はすぐ目の前まで迫っていた。

「うおりやあああ！」

火事場の馬鹿力とでも言うのかがむしやらに羽ばたいて上昇した結果、辛うじて炎の一撃をかわす。  
でもその炎の余波は凄まじく、おっさんの体のあちこちが焦げた。

「面妖なスキルを持ってますわね」

空のおっさんへと目を向けた少女が面白いものでも見たかのような  
微笑みを顔に携える。

「あんたは危ないもん持つてるね」

「危ないなんてとんでもないですわ。魔法ほど高尚な力なんてありませんわ。魔法とは……」

「そうですか。んじやおっさんは逃げます。あばよ、貧乳」

「こら、わたくしがせっかく魔法について講釈をしてあげようと言  
うのですから聞きなさい！ とゆうか今なんつた！？」

おお、すっげードスの効いた声。

こりゃ殺意割り増しだな。

殺されても敵わん。逃げられる時に逃げる。

そもそも人恋しいからと言って関わって良かった人種ではなかった。

「逃がしませんわ。＜真紅の魔弾よ 敵を穿て＞」  
「ぬおっ」

向かってくる赤いスーパーボールみたいな奴を華麗にかわしていく。  
ふふふ、おっさんがクワガタ姿でどんだけ飛んでると思ってたんだ。  
これくらい避けるのなんて楽勝だ。

「何をしてますの！ 弓でもなんでも使ってあいつを落としなさい  
っ！」

「は、はいっ」

むおっ、今度は弓矢かよ。

まあ、狙撃ライフルとかがなくてよかった。さすがにライフルの弾  
はアニメのキャラクターでもない限りはよけらんねーからな。

さーて、逃げることに集中しないとさすがにヤバい。おっさんの全  
力、その身に受けやがれ！

なんとか追撃をかわしながら逃げていると次第にポツリポツリと  
雨が降り、次第に雨足を強くしてきた。

そのせいなのかどうかわからないが、少女の追撃は止み、おっさん  
も一安心ということとで近くの森へと身を隠した。

しかしあれだ。天然のシャワーは有り難いんだが、降り注ぐ雨が強  
すぎて一メートル先も見えない。

どこか雨宿りが出来る場所が必要だろう。

おっさんはそんな場所をわざわざ探す必要はない。

ここは森。つまりおっさんのホームグラウンドなのだからそこの

木にでも適当な場所を聞けば良いのだ。

教えてもらったのは森の奥地にある洞窟。

入口は人が一人ようやく入れるほどに狭く、中は先が見えないほどに暗い。

熊とかが住んでるわけではなさそうだが、蛇とかがいそう。

「ふい」

人型になって洞窟に入ったおっさんは入口付近に寄り掛かって座り、大きく息を吐いた。

なんとも言えない体験だった。

まあ、一度殺された身からすればすでに通った道だと開き直れるのだが、やはり問答無用で殺されるというのは慣れないものだ。

斬撃無効のお陰で斬られることはなかったが、少女の魔法で火傷を……あれ？ ない？ 火傷の跡がないぞ？ 火傷しなかったのか？

いやいやいやあれで火傷しないなんてことはありえねーよ。でも現に火傷はしてない。

「わけわかんねえ……」

この世界はおっさんの想像を斜めにした出来事がよく起こる。

だからと言って自分で考えても埒がない。まあ、難しく考えてもしようがないのかもな。

誰か説明してくれる人が現れるまで保留にしよう。

今は火傷しなくて良かったことで一件落着。おっさんはハッピー、はい終わり。うん、これでいい。

それにしても腹減ってきたな……

おっさんが持っていた日保ちする食料なんかの荷物は少女らに捕まった場所に置いてきてしまった。

森にいけば食べられる物を採集出来るだろうがさすがに土砂降りの中をと言うのは億劫だ。

では選択肢としてあるのは、我慢するか洞窟の奥に行ってみるかしかないわけだが、軽率な真似は危険だということを実感したばかりのおっさんは雨が晴れることを信じて待つことを選択したのだった。

## おっさん、逃げる（後書き）

アニメのキャラクターでもない限りとか同じ架空の存在である小説のキャラクターが言うことに我ながら違和感を覚えてます。

なーんか次の展開が読めるぞって思われるかもしれませんが、それは胸のうちに秘めといて下さい。

おっさん、洞窟の中で……

洞窟に入ってからどれくらいの時間が経ったのだろうか。

少なくとも丸一日近くは経とうとしているのかもしれない。

その間ずっと天候の回復を祈っていたのだが、その祈りは通じず空の機嫌は悪くなっていくばかりだ。

雨が強くなるだけでなく、風が吹きすさび、雷公様が絶え間無く降り注いでいる。もうこれは嵐と言っても過言ではない。とゆーか嵐そのものだ。

洞窟の入口付近にいては風に煽られた雨が侵入してくるので、おっさんは現在、洞窟内をちよつとばかり進んだところにいる。

腹の虫はすでに限界の域に到達しようとジワジワと近付いてきてるところだ。

たった一日でと思うかもしれないが、この体は存外燃費が悪いのだ。

車で例えるならば一リットルで五キロくらいだろうか。昨今の低燃費の風潮で一リットル三十キロ走る車も開発されているというのに嘆かわしいことだ。

まあ、おっさんが乗ってた車は一リットル十五キロ程度でそれを基準にしているから、大体人の三倍は食料を消費すると考えてくれ。

おっさんが村にいた頃に畑仕事をするようになったのも、お前はよく食うんだから自分で作れみたいな揶揄があったからこそだ。

とりあえず、おっさんは人より食うので食料を確保せねば餓死してしまう恐れがあることはわかって頂けたかと思う。

そして、外に出るのは天気都合上無理となれば残る選択肢は洞窟の奥に何かないか探すしかない。

どんな生物がいるか分からないから危険？ そんなものこの空腹の前では関係ない。

むしろどんな生物であろうとも不意について殺して食ってやるくら

いの意気込みを見せなければなるまい。

弱肉強食焼肉定食、所詮この世は食うか食われるか。道具がないから火をおこすことが出来ないのが残念だ。

暗い暗い洞窟を進んでいく。

その歩みは牛歩の如くゆつくりと、細心の注意を払いながら恐る恐るといった調子だ。

この洞窟は内部が入り組んでおり、先を見通すことが出来ないが、身を隠しながら進むにはうってつけだった。

どれほど進んだのだろう。

入口から計れば大した距離を進んでないかもしれないし、もしかしたら結構な距離を進んでいるのかもしれない。

そんな曖昧な感覚でしかなかったが、この光景を見ればそんなことは吹き飛んでしまった。

洞窟内を進んだ先にあったのはとてつもなく広い空間だった。

暗く狭かった洞窟の中を進んでたどり着いたというのにそこは仄かに明るく、野球場が丸々入る大きさで、天井は見上げるほどに広い。

「ん？」

天井を見上げていた視線を戻すとおっさんの入ってきた道とは反対側に明らかに人の手によるものと思われる扉があった。

「行ってみるか……」

扉の前に立ったおっさんは意を決して扉をノックしてみる。次いで

「ごめんください」

声をかけてみたが反応は返ってこない。

聞こえなかったのかと思い扉に手をかけて開けてから中に声をかけることにする。

そして開け放った扉の中に見たのは確かに人が暮らしていると思われる場所だった。

洞窟の中に作られた住居とでも言うのだろうか。

天井は約三、四メートルの高さがあり、通路の幅はおっさんが昆虫形態のスキルを使ってクワガタになっても余るくらいはある。

「すいませーん」

声をかけたがやはり反応はない。

誰もいないのだろうか？ それとも居留守？

どっちにしろ人が来るまで扉の前で待機しているべきではないのか。しかし、そんな考えは懦弱だとばかりに腹の虫が催促する。

おっさん自身も限界が近い。それがおっさんから冷静な判断力を奪っていく。

そしてそのまま扉の内部へとおっさんの足は進んでいった。

扉内部の通路の横には部屋のように区切られたスペースがあり、中を覗いて見れば寝台であろうものが確かにあった。

その他にも調理場や書庫などの確かに人が住んでいる形跡がある。

「すいませーん。誰か居ませんかー？」

声をかけてみる。

これが住居ならば侵入したのはおっさんだ。

不法侵入など泥棒の所業だ。そんなことは分かっている。

なのでおっさんは迷い込んだ旅人という設定だ。設定というかその

もののだが、そういうスタンスをアピールしとかなないと住んでる人に会った瞬間に切り掛かって来られそうだ。  
あの赤髪少女みたいに人の話を聞かないような人物だったら出会った瞬間にアウトだが、あれはわりと稀な例だろう。

「あのー、すいませーん」

しかし、おっさんがいくら声をかけようとも反応は返ってこない。  
うーん……とりあえず誰もいないと仮定して調理場を漁ろうか。いやいや、そんなんしたらもう言い訳できない。  
とりあえず誰かいないかくまなく探してみよう。

いくつかある部屋の中を探してみたが、人の姿を確認することは出来ない。

やはり誰もいないのだろうか。

最後に残ったのは通路の奥にある扉。

他の部屋には扉がないのにここだけには扉が存在する。

そのことに微妙に嫌な予感がしなくてもないが、ここだけ見ないということは出来ない。

生唾を飲み込み、扉に手をかけ開けてみる。

しかし、そこには誰もおらず十畳ほどの空間があった。

ただし、中がちょっとおかしい。

なんとゆーかファンシーな世界観なのだ。

壁一面がピンク色でぬいぐるみやおもちゃやらがいっぱい。お、幼児が使う滑り台まである。

部屋の中央には普通の三倍はある大きさのベビーベッドらしきものがあり、その頭上にはクルクル回るおもちゃ、通称オルゴールメリーである。

完璧に赤ちゃんの部屋だ。

とゆーか品揃えが豊富過ぎてこの部屋の持ち主の親バカ度がよくわ

かる。

ただ、その部屋の持ち主である存在の姿はない。その代わりにベビーベッドにはダチヨウの卵より大きな真っ白い卵が鎮座している。今のおっさんは猛烈な空腹に襲われている。そんな時に卵なんてご飯に合いそうなものを見つけたのだが、こんな部屋に君臨する卵を食材として見ることが出来るのだろうか？ いや、わかる。あれは食材として決して見てはいけないものだ。ただ好奇心がくすぐられてしまうのは仕方あるまい。一体あれは何の卵なのか。そして卵生の生物におもちゃなどをわざわざ用意するのはどんな人なのかと疑問が沸いてでてくる。

溢れる好奇心を抑え切れず卵へと近付く。  
そしてそつと手を触れてみた。  
手触りはツルツルで微かに温かい。

【無色の魔力溜まりを感知。吸収成功】  
【ラルドは認識偽装のスキルを得た】  
【ラルドは衝撃無効のスキルを得た】  
【ラルドは時間遅延のスキルを得た】

え、何？ 何事？

いきなり天の声が聞こえたけど……  
つてあれ？ この卵つてこんなでかくなかったよな？  
なんか小学一年生のお子さんが丸々入ってそうなくらいに巨大化してんだけど……

あまりの出来事におっさんビックリというか呆氣にとられています。

しかし、そんな時間も長くは続かない。  
なぜなら卵にひびが入ったからだ。

「え、嘘？ 生まれんの？ えーっ！？」

はい、パニック状態です。

体が自動的に動き、卵から一步、二歩と後ずさる。ついには壁へと背中がくっついた。

そうこうしているうちに卵は割れ、中から出てきたのは卵と同じく真っ白な体の翼のあるトカゲ。

違う。

どう見ても竜だ。

竜はおっさんの見ている前で翼を大きく広げ、辺りをキョロキョロと見回す。

そしてその蒼い瞳がおっさんへと向けられ、ぱっちり目が合ってしまった。

「■■■■■」

竜が何事か叫ぶが、それはおっさんでは判別出来ない。聞いたままを表現すればギャウーだろうか。

竜が口を広げておっさんへと飛び掛かってくる。

生物の親というのは大体が子供のために餌を用意するものだ。実際おっさんも幼虫時代は親であるクワガタに餌をもらっていた。

ならば竜がおっさんのことを親が用意した餌だと認識しても不思議ではない。

「お、おっさんを食べたら腹壊すよ！ 装甲とか邪魔でしょ！？」

理解していないだろうとは思いつつも必死で弁明を試みる。

無駄な弁明をする前に逃げろと思うかもしれないが足が竦んでしまつて動かない。

ファンタジーな世界とは割り切つていてもその象徴たる竜の前では

おっさんの思考など関係なく、いざ目の前にしてみると体の方が反応してくれないのだ。

だが、竜はおっさんの予想に反して目の前で静止し、おっさんの顔をペロペロと舐め出した。

「ほえ？」

思わずマヌケな声が漏れる。

しかしそんなことは意にも返していないのか、竜のペロペロ攻撃は尚も続く。

うわぁ、顔が竜の唾液でベチヨベチヨだ。

「ストップストップ舐めるのやめなさい」

竜の頭に手を置いて行為を制止する。

ちゃんとおっさんの意図が伝わったのか竜はペロペロするのをやめてくれた。だが、今度は頭をおっさんの胸にグリグリと押し付けてくる。

その……なんだ、もしかしておっさんってはこの竜の親とか思われてたりすんの？

「おっさんはお前のお父さんじゃないよ？」

そうは告げても理解はしていないのだろう。

グリグリ攻撃が止むことはない。

なんとゆーか、こつも懐かれるとおっさんの父性を刺激されるな。

だがおっさんが親でないのは純然たる事実だ。

それに、本当の親御さんに申し訳ない。

だってベビー用品をこんだけ揃えるくらいにこの子が生まれるのを  
楽しみにしてたんだろうから……

「リリーッ！」

その時だ。

扉を蹴破る勢いで一人の女性が部屋の中へと入ってきた。

その女性は一言で表すなら美人と言う以外に言葉が浮かばない。

髪の色は光沢を持った白で歳をとって増えて来る白髪とは似ても似つかない。髪の長さは肩くらいで水分を多分に含んでいるのかポタリポタリと髪の中から水滴が落ちている。

どこかのパーティーに出てたんですかと聞きたくなるような艶やかな青のドレスも同様に水に濡れてその肢体に張り付いており、メロソソと云いたくなるような胸元やむっちりとした臀部をより艶やかに演出している。

「卵が割れてる……っ！」

女性は愕然とした表情を浮かべた次の瞬間にこちらに視線を移し、まずは竜の姿を見て頬を緩めたかと思いきや、ギロリとおっさんのことを睨む。

彼女が部屋の中に入って初めて真つすぐに顔を見たのだが、少し長めの睫毛や目鼻立ちが綺麗に整っているため、やはり美人である。そしておっさんが勝手に認定した左目の目元にある泣き黒子がやたら色っぽい。

ただおっさんを睨んでいるためなのか竜を見ていた時は穏やかで少し垂れ気味だった蒼い瞳は鋭角に吊り上がり、口は歯ぎしりが聞こえてきそうなほどに噛み締められている。

「リリーに何をしたあっ！」

女性が声を怒り一色に染め、おっさんに近付いてくる。  
そして同時におっさんの顔に向かって彼女の握られた拳が迫ってく  
るのが見えた。

あ、これ問答無用で殴られるやつだわ。

おっさん、洞窟の中で……（後書き）

やっとここまで来たって感じですよ。

ただ、またおっさんが強化されてしまった……

全然戦ってないのにまた防御力アップ

タグがあらすじにその旨を入れるべきなのかどうか……

## おっさん、話し合う

女性の拳はおっさんの顔の中心を正確に打ち抜いた。

「普通に痛いっ！」

「なっ!？」

激痛に顔をしかめるおっさんと驚愕の表情を浮かべる女性。

おっさんの味わった痛みは例えるまでもなく人に殴打された時のそれだ。

だというのにその衝撃自体は全くないためのけ反るということはなく、ただ単に痛みだけが顔を起点に全身に回る。

「効いてないですって……」

「いや、痛いって言ったじゃん」

「くっ、ならばっ！」

女性はおっさんのツッコミを無視して距離をとり、構える。

「限定、部分解除」

女性の呟きと共にその右腕が白い鱗と爪を持ち肥大化する。

女性の華奢な身体には似つかわしくないその腕は、今なおおっさんの胸に顔を擦りつける竜のものと酷似していた。

「見かけによらずたくましい腕をお持ちですね……」

あれはやばくね？

殺る気が伝わってくるんですけど……

「とりあえず落ち着いて話でも……」

「黙れっ！」

そうは言っても……

とゆーか、なんでこうも立て続けに人の話を聞かない女と出会うの  
だろうか。

おお、ゴッドよ……おっさんはあんたになんかしましたっけ？

「リリーに施された護りを解くだけに留まらず、拐かそうなんて万  
死の刑に処してもまだ足りないわ」

要するに凄く怒ってますと彼女は言いたいらしい。

事の成り行きを弁明したいのだが、どうせ聞いてくれないんだろう  
な……

だったら！

「武装を解除しろ。こいつがどうなってもいいのか？」

胸に擦りつけられる竜の頭を抱え込みながら女性を脅迫する。

第三者の目から見ればおっさんは悪だ。

だが、こうでもないと言聞いてくれそうにないんだもん。

「……下種め」

女性の腕が元の白魚のような腕へと戻っていく。

ああ、心が痛い。

だけど睨みつけるその瞳はご褒美と言えなくもない。

「おっさんの話を聞いて貰おう。あと、いくつか質問がある。拒否

権はない。拒否すればこの竜がどうなるかわかってるだろうな……  
あ、こら顔を舐めるんじゃない」

ペロペロ攻撃リターンズ。

おっさんの顔は飴じゃないんだから、甘くないよ。むしろ塩っ気があるはずだからね。

「……リリーに手出しはしないで」

「君がわっぷ……素直にぬおっ……おっさんのおほっ……要求をのほほ……受け入れてくれるのならにあっ……だからやめなさいってば」

「クウーン……」

「そんな叱られたワンコロみたいな声で鳴いてもダメだよ。おっさんらは今から大人の話し合いって奴をするんだからね」

竜に言い聞かせるかのように言う顔と顔を舐めるのは止めてくれたのだが、おっさんの胸板という名の装甲に顔を擦りつけるようにして甘えてくる。

まあ、顔を舐めないだけマシか。

さて、これからこの女性への質問タイムだ。  
しかしその前に……

「まず、食べ物をお恵んでくれませんか？」

腹を満たすことを優先しよう。

与えられた食料は黒いパンと干し肉だった。欲を言えばスープレッ的な汁物が欲しいのだが、用意してくれと言って素直に従ってくれるかは不安だ。

そりゃあこっちには人質ならぬ竜質がいるのだから表向きは素直に聞いてくれるかもしれないが、これ以上好感度を落とす行為はいただけない。

今もおっさんがパンを咀嚼する行為の一挙手一投足を注視し、下手なことをしたら暴力に訴えて立場を逆転されかねない。

「さて、話し合いをはじめようか」

「……望みはなに？」

「だから話し合いだってば」

「リリーの心臓？ それとも鱗や爪、牙かしら？」

「いや、聞いてよ……」

「でもおあいにくさまだけど、リリーはまだ生まれて間もない幼竜に過ぎないわ。あなたの欲するドラゴンの魔力素材としてはまだ大した力を持っていない。だからリリーを今すぐ解放して。代わりに私があなたへ心臓を提供するから」

おっさんの話を聞いてないのか、それともあえてそうしているのか女性は一気にまくし立てる。

「だからまずはおっさんの話を聞きなさいっ！」

故に怒鳴り付けるように声を発した。

まずは何事も話し合いが肝心だ。

相手を話し合いのテーブルに着かせることは先の少女の時は失敗したが、今度こそはと意気込みをかける。

「わかった……」

おっさんの熱意が通じたのか女性が話を聞く態勢をとってくれたのは僥倖だ。

「まずは円滑な話し合いのためにお互いの自己紹介と行こう。まずはおっさんからね。名前はラルド。ダンディかつストイックな男で未婚です。あえてもう一度言つと未婚です。好みのタイプは君のような果物屋さんを開けるボディの女性です」

「ラルド……ふっ」

なんか名前を鼻で笑われてしまった。

とゆーかおっさんの好みのタイプはスルーですか？

まあ、今思つと好感度がダウンするようなことを言ってしまったのでスルーしてくれるのは有り難い。

「次はそつちね」

「クラベジーナ」

女性の答えは簡素な単語ひとつだ。

恐らくではあるが、

「それが君の名前かな？」

おっさんの言葉にクラベジーナさんはコクリと一回だけ頷いた。なんとも素っ気ないことだ。

「んじゃまずはおっさんの釈明を聞いてくれ……」

そうしておっさんはどうしてここまで来たのかと、なぜか竜が卵から生まれておっさんに懷いたという状況を一からバカみたいに正直に説明した。

この場において嘘を混ぜるのは大した益を生まないし、ばれた時に厄介だからな。

「……それを信じると？」

「出来れば信じて欲しいかな」

「たまたまここへ入り込み、偶然リリーの卵に触れたら、なぜかリリーが生まれて懷かれた。ドラゴンの魔力素材には全く興味が無いそんなご都合主義のような豚の言葉を信じると言うのか」

「そうだよ……っていうか今、おっさんのこと豚って言った？」

「お前はラルドという名前なのだろう？　ならば豚だろ」

全く脈絡がない。

でも豚と呼ばれても悪い気はしないな。

「まあ、いい。リリーを解放して即刻ここから出ていけ。ここを口外しないと言うのなら殺しはしないでやる」

それに正直が過ぎて立場が逆転しちゃった。

おっさんと竜の様子を見れば、竜質としてどうしようと思っていないことが丸わかりなのも原因の一端を担っているかもしれない。

「よし、リリー」

「リリーが汚れるから名前で呼ぶな」

……君はクラベジーナさんの元に行きなさい」

……行く気配がないな。

どないしょ？　とばかりにクラベジーナさんへと視線を移す。

「リリー？ そんな豚なんか構ってないでこっちにおいで？」

しかし、リリーはクラブジーナさんの言葉を無視しておっさんに纏わり付く。

「リ、リリー？」

クラブジーナさんの顔に困惑と焦燥が浮かぶ。

ハッキリ言えばリリーの中ではおっさん＞クラブジーナさんの構図が作り上げられていると言ってよいのかもしれない。

「豚、どういうこと？」

「……おっさんが聞きたいよ」

「あんたリリーに何かしたわけ？」

「神に誓ってないはず……だよね？」

おっさんがしたことと言えば卵に触って、リリーが生まれて、リリーがおっさんを見たかと思ったら懷かれた。ただそれだけ。

しかしそのプロセスの中に何かしらでかしてないと言い切れない。

「ちなみに竜って生まれて初めて見た存在を親だと思う生物？」

「断じて違うわ。確かにドラゴンは初めて見た存在を親と思うけど、ドラゴンは同種の魔力を感じ取ってるからドラゴン以外の種を親とは認識しないわ。だからたかが人間のあんたを親と誤認するのは有り得ない話だわ。ほんつつつつとおおおに何もしてないのね？」

念を押されて聞かれてもなー。

頭を働かせる。

そもそもおっさんはカテゴリーで見ると人ではあるがただの人つてのには当てはまらないかもしれない。

なにせ虫人だ。<sup>ムシヒト</sup>そのせいなのか。

いや、竜は同種の存在を感じ取っているのならば、おっさんはアウトだ。だって竜じゃないもん。

じゃあ、何が原因だ？

考え込んでいると天啓のようにピロリンと考えが降って湧いてきた。

確か、おっさんが卵に触れた時に無色の魔力吸収のスキルが発動したはずだ。

これによって吸収したのが竜の魔力ならば、それを感じ取ったりリーがおっさんを同種として認識してしまった可能性がある。

だが、正直にこれを告げたらおっさんの命がまずいことになるのか？

結局お前のせいだとか言われて殴られるオチが見える。

隠すべきだ。そう、これはおっさんの秘め事にするべき事項である。

「な、なんにも知らないよ？」

「なにか心当たりがあるのね？」

な、なぜわかった。

クラベジーナさんは読心術でも心得ているのか……

「ない。何もない。おっさんまるで何もわからないです」

「言え」

「何も知らないってば！」

「だったらなぜ挙動不審になるのかしら？」

「おっさんは元から挙動不審だよ」

「……はあっ、まあ、リリーがあんたを父親として認識している以

上どうこう出来ないわね」

どうやらクラベジーナさんは追求を諦めてくれたみたいだ。

「すでにあんたを父親として認識してしまっている以上、あんたを殺せばリリーが悲しむ。だから今はあんたを殺さないわ」

「この子と君はどうゆう……」

「あんたには関係ない」

おっさんの質問は途中でばっさりと切られてしまった。

「とりあえずリリーの親権をあんたから私に移すわ」

「出来るの？」

「出来るのって言うかするの。あんたは父親ではないということはこの子に認識させて私が母親だと認識させる。これしか問題解決の手はないわ。少なくとも言葉を覚える前に本能に刷り込まないと……」

……」

クラベジーナさんの呟いた言葉の最後の方は小ささ過ぎて聞き取ることが出来なかった。

それにしても……

「親権がどうのこうのって、おっさん達、なんか夫婦みたいだね。クラベジーナさんのことジーナって呼んでいいかな？」

まあ、親権を争っているのなら崩壊間際ではあるけどね。でも、これを期にクラベジーナさん、いや、ジーナと仲良くなれたらいいと思う。

「嫌」

しかし、回答はただ一言だった。  
手厳しい。

だが、脳内ではジーナと呼ばせてもらいます。

「あー……そうだ。もしかしたらなんだけど、クラベジーナさんって竜？」

「……ええ」

「だよ。腕とか竜っぽいのに変わったし、リリーの代わりに心臓をどうのこうの言ってたからそうかもってちよっと思ってたんだ」

腕が変わるの見なかったら、そういう考えなど微塵も起きなかったに違いないが、さすがにあれを見てしまうとそういう考えも起きるとゆーか

「この子の母親ってクラベジーナさんなんだ」

人妻で子持ち。

旦那を知らないだけに何か滾るものがありますなあ。

「……あんたには関係ない」

しかし、そこでジーナは言葉を濁してしまった。

もしかして、リリーの本当の母親ではないのだろうか？

それにしても、ジーナと仲良くなるというのは前途多難なようである。

おっさん、話し合う（後書き）

リリーもクラブジーナも最近買った『幻想世界11カ国語 ネーミング事典』を参考にさせていただいております。  
便利です（＾－＾）

おっさん、下半身が……

「で、親権を移すってどうやんの？」

裁判所で協議するみたいなことは出来ない以上、具体的な案が必要だ。

「さあ？ 私もこんなこと初めてだし……とりあえずリリーの目の前から消えて。期間は一生」

「ふむ、それが一番確実なのかもね。ただ……外はまだ嵐だね？」  
「ええ」

笑顔で肯定された。

「とりあえず嵐が止むまではリリー」

「呼ぶなっば」

この子の視界に入らないところで過ごさせてくんない？ おっさんも用事があるから嵐さえ収まれば出ていくから」

「……いいわ」

おお、却下されて今すぐ出ていけとか言われるかと思ったけど話がわかるね。

「んじゃ、おっさんはテキトーにくつろいでるからあとヨロシク」

そう言って懐くリリーを引っぺがして部屋を出ていこうとする。

「ちょ、リリー。付いて行っちゃダメよ!？」

後ろの方でジーナが慌てたような声を上げるので振り返って見れば、リリーがおっさんのあとをちょこちょこ付いてきていた。

「いいかい？ おっさんはこれにてドロンするから君はお母さんと一緒にここにいなさい」

「■■■■■」

うん、全然わかってないね。

だってすっげー嬉しそうに鳴いてるもん。

竜の表情とかよくわからないけど確実に笑顔だわ。

「こうなったら実力行使だ」

身を翻して部屋の外に出て即座に扉を閉める。

いやー、おっさんの人生で五本の指に入るスピードだったよ。

「■■■■■」

おっさんが扉の外で達成感に包まれていると部屋の中からリリーのものらしき慟哭の叫びが聞こえてくる。

ああ、出会ってまだ一時間未満だというのにそこまでおっさんのことを……

なんて感慨に耽る余裕などなかった。

ドンツという音と共に局所的な地震が起きる。

音の発生源は今しがた閉めた扉からだ。

中の様子を伺うことなど出来ないが、ジーナの「リリー、止めなさいっ！」って声が聞こえたことから何が起きているのかは推し測る

ことが出来る。

おっさんが扉から数歩離れるのと扉に亀裂が入るのはほとんど同時だった。

亀裂が入ってしまうとあとは容易に扉は粉碎されてしまい、中から白き幼竜であるリリーが現れた。

「  
■ ■ ■ ■ ■」

リリーはおっさんの姿をその視界に入れると喜びの声を上げて近寄ってきた。

「ダメって言ったじゃん……」

ここまでやるのか。

いや、竜に人の常識など説いても詮無いことなのかもしれん。

それにしても、よく扉もあれだけ持ったものだ。五発くらいは耐えたんじゃないか？

すっげー頑丈。

「ちょっと、なんですぐに遠くへ行かなかったのよ」

リリーのあとに続いてジーナが部屋から出てくる。

顔に不満と書いてありそうな表情だ。

「まさか扉を破壊するなんて思わなかったんだよ……とゆーか力づくで止められなかったの？」

「バカ。そんなことしたらリリーが怪我するかもしれないじゃない」

言葉が出ません。

こいつはアレだ。典型的な子供を叱れない親バカって奴かもしれないな

い。だてに子供用のおもちゃを買い揃えてないな。

「じゃあ、今度こそうまくやるから協力ヨロシク」

「……ダメよ」

「は？」

「リリーがあんな声で泣くんだもの……可哀相過ぎる」

「もしもし？ それじゃ目的は達成されないのでは？ ここは心を鬼にするべきだよ」

「鬼になるならあんたがなりなさい。私には無理」

諦めるのはえーな……

まあ、おっさんが原因であるわけだし、おっさんに出来ることならなんでも協力しなければなるまい。

おっさんの挑戦が今、始まる。

で、程なくして終わった。

結果は惨敗。

リリーったら何してもおっさんの居場所嗅ぎ付けやがんの。

何度か見えないところに移動できたのに即効見つかって、はいペロペロです。

「もう一回」

ジーナが無感情に告げる。

序盤までは協力してくれたのに最早ただの傍観者に近い存在と化していた。

「うーん、でももう外に出るしか方法がないんだけど……」

外はいまだに嵐。

台風のリポーターじゃないんだから、そんな中に突撃するのは御免だ。

「外はダメよ。万が一にでもリリーがあんたに付いていったら最悪の結果が待ってる」

「ならクラベジーナさんが全力で押し止めればいい話だと思うんだけどな」

「リリーには怪我一つなく育って欲しいの。そう誓ったから……」

誰にとは聞くべきではないのだろう。物凄く気になりますけどね。それにしてもリリーのことはどうするべきか。

ジーナが実力行使を忌避している以上、打つ手がないと言える。

それにジーナの言葉から察するにおっさんが実力行使でどうこうするのには止められそうだ。暴力でもって。

まあ、そもそも何の罪もないリリーに対して実力を持って排除する考えなど端から除外の対象だ。実力自体がないとも言えるがね。ならばいっそ

「もうおっさんが父親でいいんじゃないかね？」

出来ないと言うのなら受け入れてしまった方が良い。

しかも、おっさんが父親ってことはジーナは母親だ。

つまりリリーを通しておっさんとジーナの間に内縁が生じる。

あれ？ 悪くないどころかこれって名案だろ。

おっさん目茶苦茶忤えてます。

「嫌よ」

「即答ですね」

やっぱ旦那とかいて、その辺りを気にしてるのかな？  
気配のカケラすらもないのに忌ま忌ましい奴だ。

「リリーの父親が豚とか有り得ないわ」

「……それだけ？」

「十分な理由でしょ」

「いや、ジーナの旦那の立場がなくなるからとか……」

「は？　なんで私に旦那がいる設定なのよ。とゆーかジーナって呼ぶな」

旦那はいない、だと！？

未婚の母って奴か！

た、堪らん……

「鼻息荒い、気持ち悪い」

「おつとスマン。つついジーナの属性に興奮してしまった」

「だからジーナって呼ぶなッてば！」

「H A H A H A、ソーリーソーリーヒゲスオーリィー」

「殺す」

あ、痛い。

マウントポジション取られた。

ジーナってば無心に殴ってるよ。

しかしなんだな……このアングルは絶景だ。

したから見上げる二つの丘のなんと見事なことよ。

熱情を持て余すとはこのことか……

「ひつつ」

突然ジーナが可愛らしい悲鳴を上げ、瞬きほどの時間でその場から跳び退く。

一体どうしたと言っのだろうか……

理由はすぐにわかったが深くは語るまい。ただ、カブトムシがヘラクレスとまではいかないがアトラスくらいにはなっていたとだけは告げておく。

ジーナはその変化でも感じ取ったのだろう。

「な、なんで……バカ、変態っ！」

「男ならば当然の反応だっつーの。まあ、おっさんも恥ずかしいけどね」

顔を真っ赤にするジーナ。

しかしおっさんは断固として不可抗力の看板を掲げたい。

未だに禪一丁ふんどしなのはおっさんに合うズボンがないからに他ならない。でも恥ずかしいことは恥ずかしい。溜まってるんだろっな……

「とりあえず何か腰に羽織るもんくれ」

この台詞、虫人ムシヒトになってから二回目である。

これを言った瞬間におっさんに哀愁さが滲み出てやしないだろうか？

「ほらっ」

顔に叩きつけるようにジーナがおっさんに衣類を渡す。

それを手にとっておっさんは驚愕するしかなかった。  
なぜならば……

「ス、スカートだと……」

渡されたのは青いスカート。  
それもミニだ。

下半身に当てて確認してみたが太ももの真ん中辺りまでしかない。

「いやー、ジーナは冗談きつついなー。おっさんの性別は男だよ」

「冗談もなにもあんたに渡せるのはそれしかないわよ」

「いやいや、タオルとかでいいんだよ？」

「取れたら嫌じゃない」

確かにそうかもしれないけどさ。

「じゃ、じゃあせめてロングなスカートを……」

もはやスカートを着用する覚悟は決めた。

ズボンとかがあればまだいいのだろうが、村の男連中のものでメだったのだからジーナのサイズではパツンパツンどころか入りもしないだろう。

だったらもう妥協するしかないじゃない。

「気に入ってるからダメ」

「そーゆー問題？」

「お気に入りの服をあんたが着ていると想像しただけで寒気が走るわ」

「うう……これしかないのか……」

渋々ながら着用してみるのだが……

「ウエストがきつい」

「当然ね」

全然閉まりません。

「そこでこれよ」

そう言つてジーナが取り出したのは安全ピンみたいな形のもの。つ  
ーかもう安全ピンだ。

それを数珠繋ぎにしたものの端っこを閉まらないスカートへと刺し  
て留めた。

「これでよし」

よくはない。

だって男の尊厳とか諸々が崩れてくもん。

でも待て。世の中にはメンズスカートという分野のオサレアイテム  
も存在する。

これもそれだ。

例えばメンズスカートは一般的にズボンの上から着用するものであつ  
てもそれは一般的な話であつて、一般的じゃないならばズボンを履  
かなくてもオツケーなんだ。

改めて自分の下半身を見してみる。

スカートから禪が見えるのはご愛嬌としてオシャレとしてみると悪  
くないかもしれないかもしれない。

「気に入った」

笑顔でジーナに伝える。

しかし、その発言を聞いたジーナの顔は確実にドン引きだった。

「気持ち悪い」

彼女の言葉がおっさんの心を貫く。

現実とは斯くも厳しいものであった……

おっさん、下半身が……（後書き）

R15ならこれくらいの表現は許されますよね？  
これでも二度ほど書き直したんですよ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0990y/>

---

オッサンの異世界記

2011年12月7日13時49分発行